

Title	慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』巻第一零巻：本文篇影印並びに翻刻
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1994
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.29 (1994. ) ,p.37- 268
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0037</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

\*注記・・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合わせ下さい。

慶應義塾  
図書館蔵

〔鎌倉末南北朝〕写 『紫明抄』 卷第一零卷

— 本文篇 影印並びに翻刻 —

平 澤 五 郎

緒 言

本影印並びに翻印にあたり、本論集の編輯上、次号に予定している諸本解題にさきだち、伝存諸本に於ける該本の伝流系統上の大凡の地位を措定すべく以下の諸本調査のひとまずの結果報告を概観しておくことにする。該本は紫明抄十卷の成立期に近接する現存最古鈔本として充分に留意されるべき伝存本たる面目をそなえるものであるが、惜むらくは卷第一の孤巻をとゞむるにすぎず、過半の他巻は出現の偶然をまつのほかはなく、諸本との比較は当然のこと、自らかぎられるものである。しかし、猶当該巻を以てしても極めて近似類同する伝本—例えば京都大学国語学国文学研究室蔵本—の現存することでもあれば、該本の佚亡の巻々についての予測は多少ながらも窺見されるかとも所思し、卷第一の巻にとゞまらず、諸本における系類の概略を全巻に経目し、言及して、本編の参看に供するものである。猶現存の諸本は未だ網羅するにいたらず、更に今後の調査を俟つところである。

先ず、以下に掲示した伝本は、現時点までに披閲の時宜を得た各諸本の一應の類別的一覧であり、紫明抄十巻の全てにわたる本文上の系類を充備し、その系統論上の具体的な結尾を表示するものではなくして、従来のひとつの分類方法として採られた巻第編成―巻第一・二の両巻の間にすぎぬが―に拠る類別である。即ち、(一)は劈頭に「自桐壺巻至末摘花」を巻第一に据える伝本であり、(二)は「自桐壺巻至夕顔巻」と設定している伝本を指すものであって、あくまでも叙述上の便宜的図式であることをお断りしておきたい。

(一)

- |                           |                    |    |       |
|---------------------------|--------------------|----|-------|
| (1) 慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写     | 存巻第一零巻             | 一冊 | 略称「慶」 |
| (2) 国立公文書館内閣文庫蔵〔室町末近世初〕写  | 存巻第一零巻             | 一冊 | 同「内A」 |
| (3) 島原図書館松平文庫蔵〔江戸前期〕写     | 存九巻(欠自若紫巻末摘花巻至巻第二) | 十冊 | 同「松」  |
| 竜門文庫蔵〔江戸初期〕写              | 存九巻(欠右同)           | 五冊 | 同「竜」  |
| 国立公文書館内閣文庫蔵〔江戸中期〕写        | 存九巻(欠右同)           | 十冊 | 同「内B」 |
| 神宮文庫蔵〔江戸後期〕写              | 存九巻(欠右同)           | 五冊 | 同「神」  |
| 東京大学総合図書館蔵〔室町末〕写          | 存九巻(欠右同)           | 十冊 | 同「東」  |
| 山岸徳平氏蔵 同氏令写本(南葵文庫本)       | 存巻第六・九             | 一冊 | 同「岸」  |
| (4) 国立公文書館内閣文庫蔵〔江戸後期〕写    | 存十巻                | 三冊 | 同「内C」 |
| (一)                       |                    |    |       |
| (1) 京都大学国語学国文学研究室蔵〔南北朝末〕写 | 存十巻                | 十冊 | 同「京研」 |

(2) 京都大学附属図書館蔵 永十七年奥書〔室町後期〕写 存卷第一・三・四・九・十

三冊 同「京図」

(三)

九州大学附属図書館蔵〔室町末〕写―抄出本―

一冊 同「九」

各本解題に先立ち上掲諸本の比校の結果につき概要すると、此の場合、釋文を含む本文上に於いては、(一)―(1)と(二)―(1)・(2)とは極めて相隣接し―就中、(二)―(1)とは近似関係を示す―、叙述形態も古型の跡をとどめて、あるいは紫明抄成稿時の面影を具現する伝本として想定されるべきかとも推測され、そして右記の巻第一の編成改変の辺にその緒口が示唆されているのではなからうか、と思われるのである。

次の(一)―(2)は(一)―(1)と全く同編成にして、その本文・叙述形態共に最も近接し、(一)の伝流上の伝本として措定されながらに二・三の所引歌が増補されるなど稍々混淆の経過が予想されるのである。

更に、(一)の(3)群の諸本は同一の祖本に拠る確実なる一系統の伝写本である。しかし、その編成は(一)―(1)・(2)と同じくしながらに、本文(源氏)抄出・釋註共に両面にわたり異同するところは甚だ顕著である。且つ、それが紫明抄の個々の巻第により類同、あるいは異同するところに其の特徴を示している。それには、此の伝本群共通の奥書に看取されるごとくに複数の依拠本による書写補足の経過から派生した混糅の結果でもあろうかと推定されるのである。ともかくも、該本系の現状からは寧ろ混態本としての一異系を構成する伝本群であるといえる。

(一)―(4)は、同じく(一)の編成と同じくするが上記諸本と相違して、その経由を分明としたいが、稍々略本的な様相をとどめる一本である。巻尾には素寂より伊勢前司宛の將軍家献上次第を誌す書牘を載する奥書を附し、紫明抄成立

年次の證例として屢々所引されている伝本である。

(三)の一本は内題に「□氏物語注紫明抄拔書」と誌すごとく桐壺卷より末摘花卷までの抄出本である。末摘花卷迄の残卷であるところをみると(一)の編成本に拠るものであったのでもあろうか。

如上、さきの伝本一覧表に加え、その本文類系の概ねに言及し、同表を補足したのは誤解の危惧を避けんがためにすぎない。

## 凡例

一、慶應義塾図書館藏〔鎌倉末南北朝〕写本『紫明抄』存巻第一の影印並びに翻印である。

一、本書は零巻ながら現存伝本中の最古鈔本であり、その復元には努めて留意したが、永年の蠹蝕、毀損の瑕玷は覆いがたく、且つ褐色化した黄蘗染の料紙に沈んだ古雅な墨痕は充分な再現は期しがたく、殊に朱筆訓点との識別について不完全たらざるを得ない。

本影印に翻印篇を附載したのは、その影照化の不備を補足することにある。

猶原本は解題に誌したごとくに其の修補に当り、原装―綴葉装―を現大和綴に改められし際、以下の誤綴が生じた。元来の叙述次第は次の簽符―の丁にと継続する。本影印は現状の儘に従った。

※箒木卷 二十九丁裏―→三十六・七丁表裏―→三十丁表( )三十三丁裏

※夕顔卷 四十・一丁表裏―→三十八丁表( )三十九丁裏―→四十二丁表( )四十八丁裏

の二ヶ処である。

又、落丁が一ヶ処若紫卷四十九丁と五十丁の間に約二丁分が見出される。

一、猶本影印は原本の50%に縮小したものである。

一、翻印に際しては、従って、影印篇と両篇相互に相対応すべく、次のごとき方針をとった。

イ 原本の書写状況、注釋形態を踏襲すべく各行一字数の不統一を含め―すべてにわたり原本に准じた。

ロ 上記の誤綴は翻印に於いては披覽の便宜上、元來の叙述次第に訂し掲出することにし、両篇照合のために原本の各丁数を「符にして区切り（ ）圈内に誌した。

ハ 原本に看る上記の蠹蝕、汚損等による不明箇所については、主に京都大学研究室本の本文に拠り当該字数を□符を以て示し、解読稍々可能なるは「」圏中に記入した。

ニ 原本に施された訓点、声点、傍記書入れ、又所引本文、出典の、釋文の・、等の各頭部簽符は殆んどが朱跡であるが間々墨跡も混入し、且つ書写後の筆跡も加わり、これらをすべて判別注記することは印刷上極めて困難であり已むを得ず省略するところがある。

ホ 旧字体・略・俗字体の併用は此の時代一般の混用例の様態をとどめるものとして原本の儘に残すことにした。但し、原本の筆跡には旧字・新字体と判別しがたき諸例も散見し、その場合は通行字体を以て充当した。ことに部首の草体は識別は期しがたく、ハ―ソ、ン―ニ、ヨ―ヨ、サ―サ、シ―シ、青―青、等は現行の後者を以て統一した。

異体の筆跡は次の諸例が主なるものである。原本のそれは復元しがたく近辺の草字典に拠り以下に掲出した。

当該字は影印本に看るごとくであるので、その各翻字は初出丁数並びに行数を以て略記し、以下同字の顯出箇処については省略した。

壺―二オ1 淑―二ウ2 聖―二ウ9 館―四ウ2 承―五オ11 坐―五ウ8 喪―六オ8 隸―三オ12 夷―一  
六オ3 丞―二六ウ3 齊―一七オ4 督―一七オ4 光―一七オ12 藏―一八オ3 檢―一八オ4 樂―一八オ7 揖  
―二〇オ2 皺―二三オ5 焉―二三ウ9 殺―三オ12 傳―二六ウ5 歸―二六ウ11 最―二九ウ12 癸―三〇ウ4  
時―三〇ウ7 搔―三オ5 亥―四オ5 狐―四ウ5 癩―四オ3 符―四ウ3 譬―五オ11 毳―五オ10  
引―五オ9 循―五オ9 裏―五オ1 沈―五ウ4 象―五オ4 桂―五ウ7

その他片仮名略体は、一(キ)、テ(マ)……………等である。

へ翻印篇の末尾に附録した補注は、(一)・(二)は追訂・補筆箇所、(三)は本文に於ける存疑を掲示し他本との校勘に及んだものである。

慶應本  
紫  
明  
抄

卷  
第  
一  
零  
卷



紫明抄卷第一 目相兼卷

因法卷下 三信

冬嗣

卷之序

因法卷下 三信

良門

有邊寺

有邊寺

因法卷下 三信

利基

因法卷下 三信

東補

有邊寺

有邊寺

因法卷下 三信

雅心

有邊寺

有邊寺

因法卷下 三信

為規

有邊寺

有邊寺

紫式部

元藤式部 元澄氏也格別作存多

依此紫式部系係物方紫式部

這一位源倫方家女房

倫方

源倫方女房

一系在源倫方女房

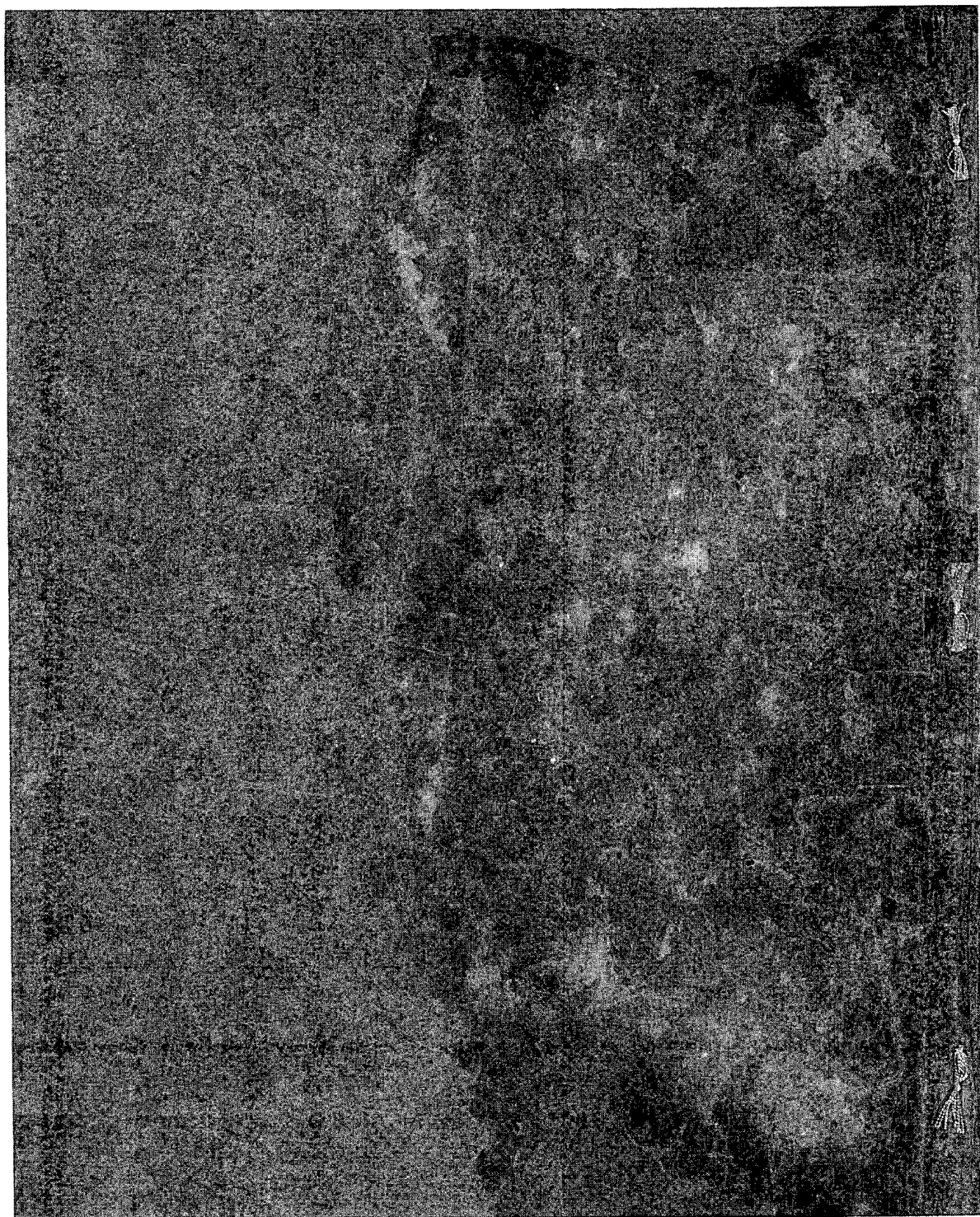
源倫方

有邊寺

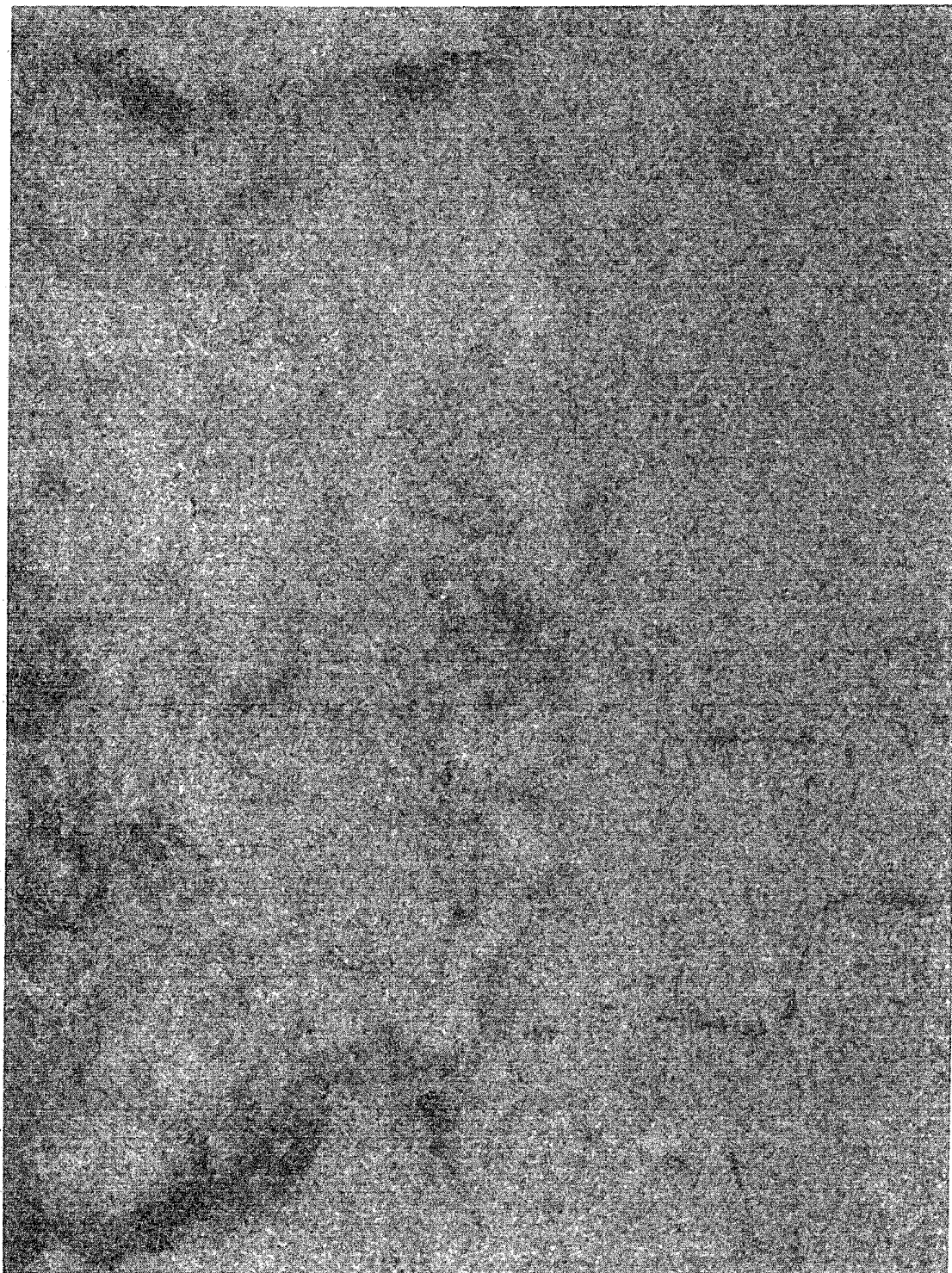
有邊寺

有邊寺

表 紙

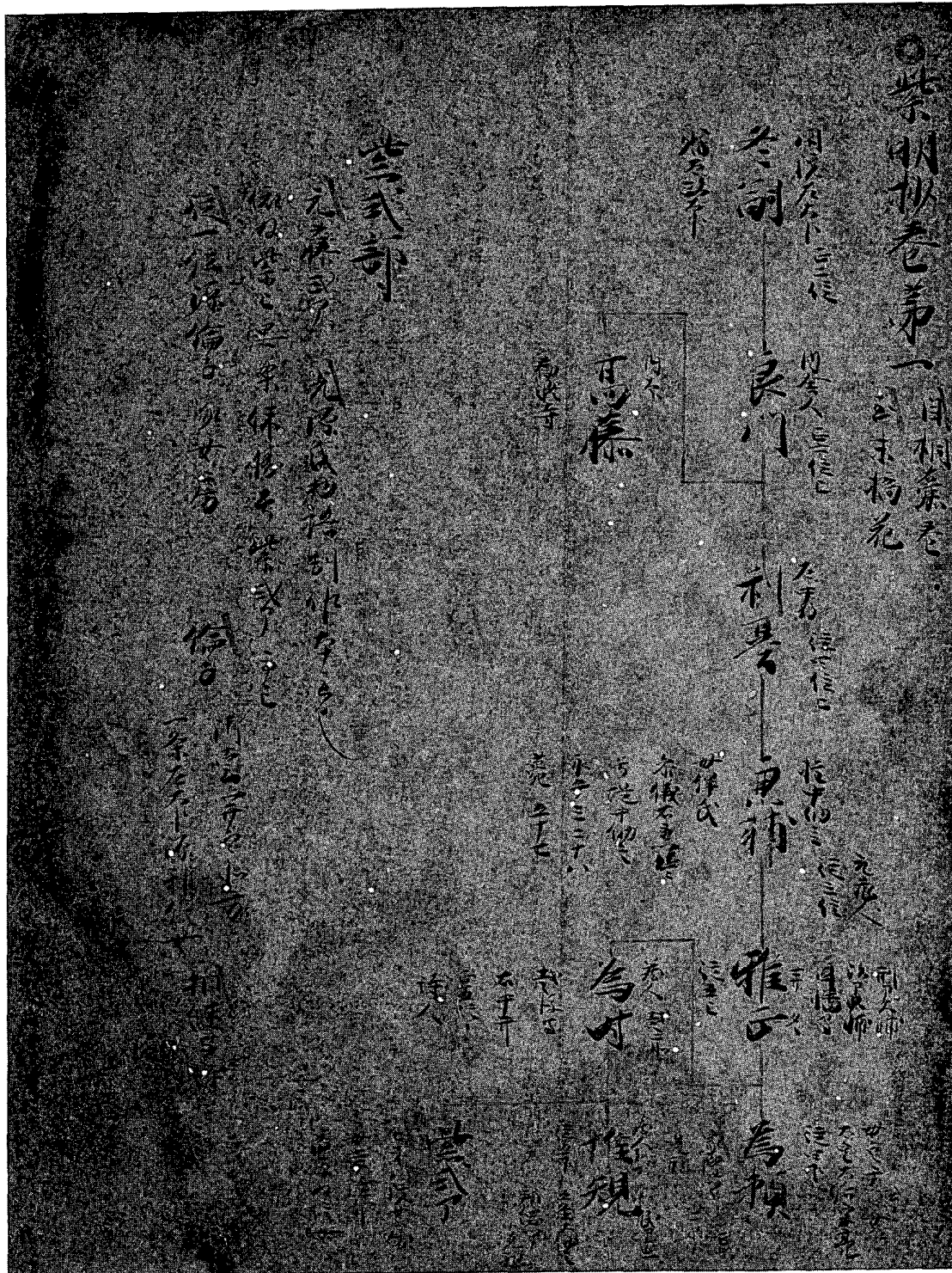


見返し





けりし御  
 こそ又しけるまれの嬰兒のいふをなまきり  
 ろうも憂いありけるまの老嫗のおしけれ  
 けりし茶のいひせこれなるし杖類の傳序よつ  
 けりし井よしなはたはてききききききききき  
 景并の流輝なるいじあまのつらぬあけ  
 けりしやうきあるうんやまの千毛のつらぬ  
 てよる藤角のいふとふるのいひりりりりりり  
 しとてふれまきききききききききききき  
 まいりえんしふるたきききききききききき  
 けりしとてふれまきききききききききき



光宗法御孫元弘元年

桐葉 新葉

藤葉 丸葉

梅葉

葉餘 昭陽

雷鳴葉 勢芳

貞觀殿

つれのぬすまの村に式をあらわすことよむ所なりしと  
てしよとまふはつるあはれぬすまられてさき花はあは

同ふえのけすよとらうたげつな一例よら  
つさあまのいれちた

春ら殿殿の帝代りるよと、朱雀院とやみそ  
くしと又高時の状もし治氏よりしと、定元は

かえいよ半つし  
皇同より、殿殿の帝を例しと、朱雀院とや名は

らつたにまをしおつし、はつしと、す村じの帝代り











仙中三代より... 桓武天皇  
代ありて... 桓武天皇  
代ありて... 桓武天皇

...の...  
花山院

南事

維略天皇七年末稚媛乃女御

後漢書云以備日備与...

之...  
河諸進河...

列中

六... 年... 年... 年... 年...

任安在 漢書李廣之妻衣衣便殿也同

以復若陵上正殿便殿寢側之制政更衣也

侍中極其衣冠

史記外戚世家之軒皇位字子天生微矣蓋于家號

氏也平陽侯之子夫為平陽主疆之武帝初即位數歲無子

平陽主求諸良家子女十餘人備直家武帝初崩上遂自過

平陽主之見所倚美人上弗說既飲詔者進上望見獨執衛

氏衣冠月八帝與主衣子更倚而衣軒中侍幸上遂坐驪

昌賜平陽主金一竹玉目愛子更奉送入公主夫之平

武侯事 後漢書

周禮言者若主信

鄭注禮記之信之言漢言在丈夫之信也

三夫人 夫人堂論婦禮

鄭玄注周礼之夫人如之云 儀禮論 礼

九嬪章教之誼

九嬪以九御周礼に 嬪章好學之法以及九御也 以之請婦法

婦言 婦功也

亦七代婦主知食祭賓客

婦服也 明言欲服事於人也 以七代又周礼代婦章祭禮有

客食化之 中堂之陳設宮之具 同著之物 掌乎 臨御不又

之象也

とあるは 志も 心も 事も 心も 事も 心も 事も 心も 事も 心も 事も

心も 事も 心も 事も 心も 事も 心も 事も 心も 事も

心も 事も 心も 事も 心も 事も 心も 事も 心も 事も







たしこまきしきりての事

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

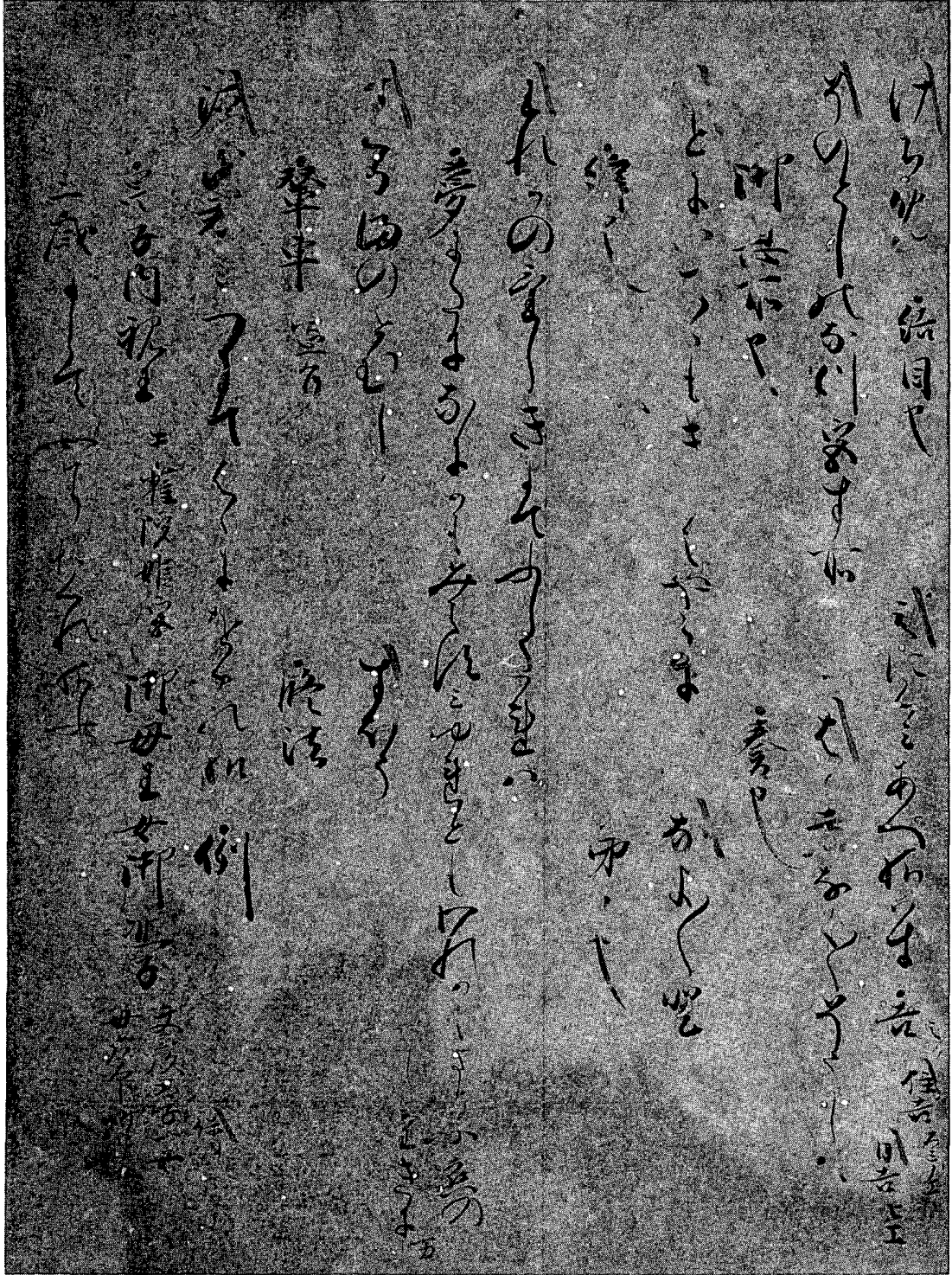
あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉

あつしきりての事 桐葉



又三...  
 中...  
 三張...  
 帳簿...  
 帳二...  
 一七張...  
 案...  
 帳...  
 向...  
 卷...  
 何...



此の御記は...  
 同。右。女。之。所。...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...



又敏行と善以言ふは男女人壽最長百五十歳  
 抄讀考易の異人ノ古凌辱  
 跡に...  
 一頁...  
 一の...  
 松の...

六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、











ありしにさるる中幸過りなむらそとく  
 とら米若段のあしりたるよと後段のちこ  
 うてうちあはるるれ せせはふよ段の  
 海にちりこのもあはるるれ一もあはるる  
 ちのさきあはるるれ一もあはるるれ  
 うけあはるるれ一もあはるるれ  
 れいといとあはるるれ一もあはるるれ  
 ちあはるるれ一もあはるるれ  
 んてい一もあはるるれ一もあはるるれ  
 ちあはるるれ一もあはるるれ  
 れいといとあはるるれ一もあはるるれ  
 ちあはるるれ一もあはるるれ



夫一劍在者其劍中人所養可保也  
 行軍中一劍一劍に修養を劍養者簡  
 利しむるは一也何れも一と修養し  
 其養の者も一はふよの養をしん  
 利は中の一はふよの養をしん  
 養育若短日高の修此者一は早  
 利の者一は早  
 利の者一は早  
 信修後人名以て信修也







漢書の禮記寺同社大行人也又漢の須之礼及人の三徳小  
 物人下大夫事邦國賓客之礼精以待四方之使名至善也  
 典客漢書百官表の典客秦官掌諸侯節節慶賀使  
 十一、石崇帝之名を大初人の武帝改て大鴻臚王莽の  
 典客胡廣漢官解詁・治の禮傳也。此位尊賢導礼有  
 而人よりんて一と曰つる不奉の云や一とがりてんて  
 てをわつるをさく人かちんてさくさくいなるはしり也し  
 く上の云とふりや一とがりてんてさくさくいなるはしり也  
 命の云とふりや一とがりてんてさくさくいなるはしり也  
 られてるやとくやつてんてさくさくいなるはしり也  
 と上

光孝の口は六年海國八親を使して大和を見たり





少くもこれに... ありては... ありては... ありては...

皇宗物指中... 皇宗物指中... 皇宗物指中... 皇宗物指中...

ひやくちり... ひやくちり... ひやくちり... ひやくちり...

三十一... 三十一... 三十一... 三十一...

爾... 爾... 爾... 爾... 爾... 爾... 爾... 爾... 爾... 爾...

所... 所... 所... 所... 所... 所... 所... 所... 所... 所...

才... 才... 才... 才... 才... 才... 才... 才... 才... 才...

被... 被... 被... 被... 被... 被... 被... 被... 被... 被...

村... 村... 村... 村... 村... 村... 村... 村... 村... 村...

門... 門... 門... 門... 門... 門... 門... 門... 門... 門...

退... 退... 退... 退... 退... 退... 退... 退... 退... 退...

言... 言... 言... 言... 言... 言... 言... 言... 言... 言...

與山氏作以元  
 宅各祠台合女具之今詔律下年  
 比合甲天慶三年秋之元作之內廣察中具教念說十  
 日下之日於授不與下好之祠之書門府之及等物之左右  
 無之及與河監守等々  
 而於做位事之末香無殿之可積中合伴木物有宜有  
 自合示門之入之部以并下之治下之史之八之為之等々  
 此皆為遠使之於并下之之政下之之石近之具之等々  
 亦乃書門之入之部以并下之治下之史之八之為之等々  
 彼伴物下之之月時等々之月時等々之月時等々  
 州之書門之入之部以并下之治下之史之八之為之等々  
 長正八年 庚戌

一、あるのよ、くうくう、くくく、  
 亦、然し、は、か、か、か、  
 二、あるのよ、く、く、く、  
 三、あるのよ、く、く、く、  
 四、あるのよ、く、く、く、  
 五、あるのよ、く、く、く、  
 六、あるのよ、く、く、く、  
 七、あるのよ、く、く、く、  
 八、あるのよ、く、く、く、  
 九、あるのよ、く、く、く、  
 十、あるのよ、く、く、く、

まゝのやうな事  
 事はしりなきもあつたと思はすはやくはやくの  
 事とていふ事もあるがうらむ事ありき  
 安永三年十月二日故人名一女子倍謂副外見書と記  
 孝和三年八月二日三條天皇御祭所見書と記  
 此院名相國女尚侍安子の副外見書と記  
 ふん  
 故らと内見事しと云 酒三許し 飲酒去の化子  
 引く事ある事ありて 引くは 人の命ね  
 言ひ  
 後内見書と記  
 引く事ある事ありと云  
 引く事ある事ありと云









●光源氏物語巻の二 第卅  
 ひろくちひーあひのこしとて  
 致慶親と、子良弟にふし 三つ長年二十六。美  
ちの美家女  
 御心くわんをいさつ中 隠中  
 女とて女もし、ちのあひ 御心くわんをいさつ中 文政自 用  
 おもひよ、美家 ちのあひ  
 しの蔭、美家 ちのあひ  
 美川中侍美家よつ病す、美家 ちのあひ  
 しのこ、美家 ちのあひ  
 ちのあひ、美家 ちのあひ  
 ちのあひ、美家 ちのあひ

秋三ノ月ノ初ニテハ  
 我方ハ海ノ東ノ方ニ在リ  
 西ノ方ニ在リ  
 日伊記  
 漸ク坂名ノ下ニ至リ  
 國房ノ後  
 番長  
 豊後  
 自今ノ成ルニ至リ  
 一ノ年ノ中以テ二月ノ如ク  
 國房ノ在リ  
 諸國ノ自今ノ後國郡  
 各縣邑ノ其肯即  
 國ノ終リ  
 各領  
 又  
 各領  
 又  
 各領























清見 カトシツキ 山崎  
 かくにむかひなきて一あるは  
 心ゆくもなほとて春駒のにはなほ  
 いかれしものたはしけり  
 ながれはなほとてあはれはなほ  
 なるいふはなほとてなほとて  
 あり  
 かなしきものなほとてなほとて  
 川田 カノエ  
 うらとに休よとありしはなほとて  
 心ゆくもなほとてなほとて  
 心ゆくもなほとてなほとて  
 心ゆくもなほとてなほとて









一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、











此の世に於ては、世の運命は、人の徳に由りて成るるなり。徳を修め、善を積むれば、世は安んじ、人々は豊かに暮らすべし。徳を失ふれば、世は亂れ、人々は苦しむべし。此の理を明かにし、世に告ぐべし。

徳は、心の中にある。心を正せば、徳は自然に生ずる。徳は、人の徳に由りて成るるなり。徳を修め、善を積むれば、世は安んじ、人々は豊かに暮らすべし。徳を失ふれば、世は亂れ、人々は苦しむべし。此の理を明かにし、世に告ぐべし。

徳は、心の中にある。心を正せば、徳は自然に生ずる。徳は、人の徳に由りて成るるなり。徳を修め、善を積むれば、世は安んじ、人々は豊かに暮らすべし。徳を失ふれば、世は亂れ、人々は苦しむべし。此の理を明かにし、世に告ぐべし。

徳は、心の中にある。心を正せば、徳は自然に生ずる。徳は、人の徳に由りて成るるなり。徳を修め、善を積むれば、世は安んじ、人々は豊かに暮らすべし。徳を失ふれば、世は亂れ、人々は苦しむべし。此の理を明かにし、世に告ぐべし。

徳は、心の中にある。心を正せば、徳は自然に生ずる。徳は、人の徳に由りて成るるなり。徳を修め、善を積むれば、世は安んじ、人々は豊かに暮らすべし。徳を失ふれば、世は亂れ、人々は苦しむべし。此の理を明かにし、世に告ぐべし。





















去

化

英

蘇

蘇

蘇

蘇

蘇

蘇

別

報

...

...

...

...

...

...

三史

史記 漢書 後漢書 三史 禮記 春秋 內易 尚書

一人の心を  
 楚原原水まよつて三回又つらわし  
 報向（報向）とよ人屋原、才情の情もろもろ結をまよし流す  
 十流のうらみさ、原原をくまむれを原原江頭より  
 皆解明し誤りのむき成り又つらわし  
 又、あつたや原原を世首濁まり我れつらわす  
 一皆何我獨脱り此故、まよくわつた浮人の世首濁  
 ちるや浪をあらをう人皆解り何う精をまよらる  
 原原、こしく沐する也、まよつたを、あつた  
 誤文、浪浪のわしつらわし我れつらわし  
 濁り、成を流し、原原我無版よりせしむら  
 三、一、江原、まよつた原原、まよつた原原

とよまきくのふくくふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 ていく、河のなまも龍のふりや我命とくふふふ  
 弟の繁よけいふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 よひかりやまらまらり、ふくふくふくふくふくふくふく  
 てふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 屋 しくふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 ちのふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 ふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 月々のふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
 九相應物<sup>の</sup>を陽ら、ふくふくふくふくふくふくふく  
 秋九月九日よ家よふくふくふくふくふくふく  
 ふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

八咫のつゝもたまはれいづれか  
 吉と序らふ交置とひるはれいづれか  
 八人のをん業はたよあらんととふ  
 八人のをん業はたよあらんととふ

手塚  
 八咫のつゝもたまはれいづれか

八咫のつゝもたまはれいづれか  
 吉と序らふ交置とひるはれいづれか  
 八人のをん業はたよあらんととふ  
 八人のをん業はたよあらんととふ

八咫のつゝもたまはれいづれか  
 吉と序らふ交置とひるはれいづれか  
 八人のをん業はたよあらんととふ  
 八人のをん業はたよあらんととふ







割

無使首言真孤仙十叔谷行波一朝一夕迷及眼十の机の  
審判亦日女月長西ノ心公集

いしきあわらふしよしつひじあすくろく 後 農

かといふれれあしけりくまろくうあなまひりうすの

とこしつりつりあまもり

桐とる

枕と

しんありのあしきふこのこと

六月九日正夜兼 千發方聲言し

いんのるあまろくす

復善家の善始乱兼年愛、桑柳并

兼家公集

礼記月令云 書反然字始復

なるはるあまろくす



















久し... 寺始... 推...  
 交一... 延元九年... 源揚... 浪瀬...  
 七... 大... 小...  
 ...  
 ...





伊弉諾(食) 伊弉諾(食)

伊弉諾(食) 伊弉諾(食)

三つ

談話

以三つ在く馬あつたり... 河の水... 清水の如き

千手地蔵

伊弉諾(食) 伊弉諾(食) 伊弉諾(食)

清水寺歌音

伊弉諾(食) 伊弉諾(食) 伊弉諾(食)

伊弉諾(食) 伊弉諾(食) 伊弉諾(食)

檀那田持地持軍 伊弉諾(食)



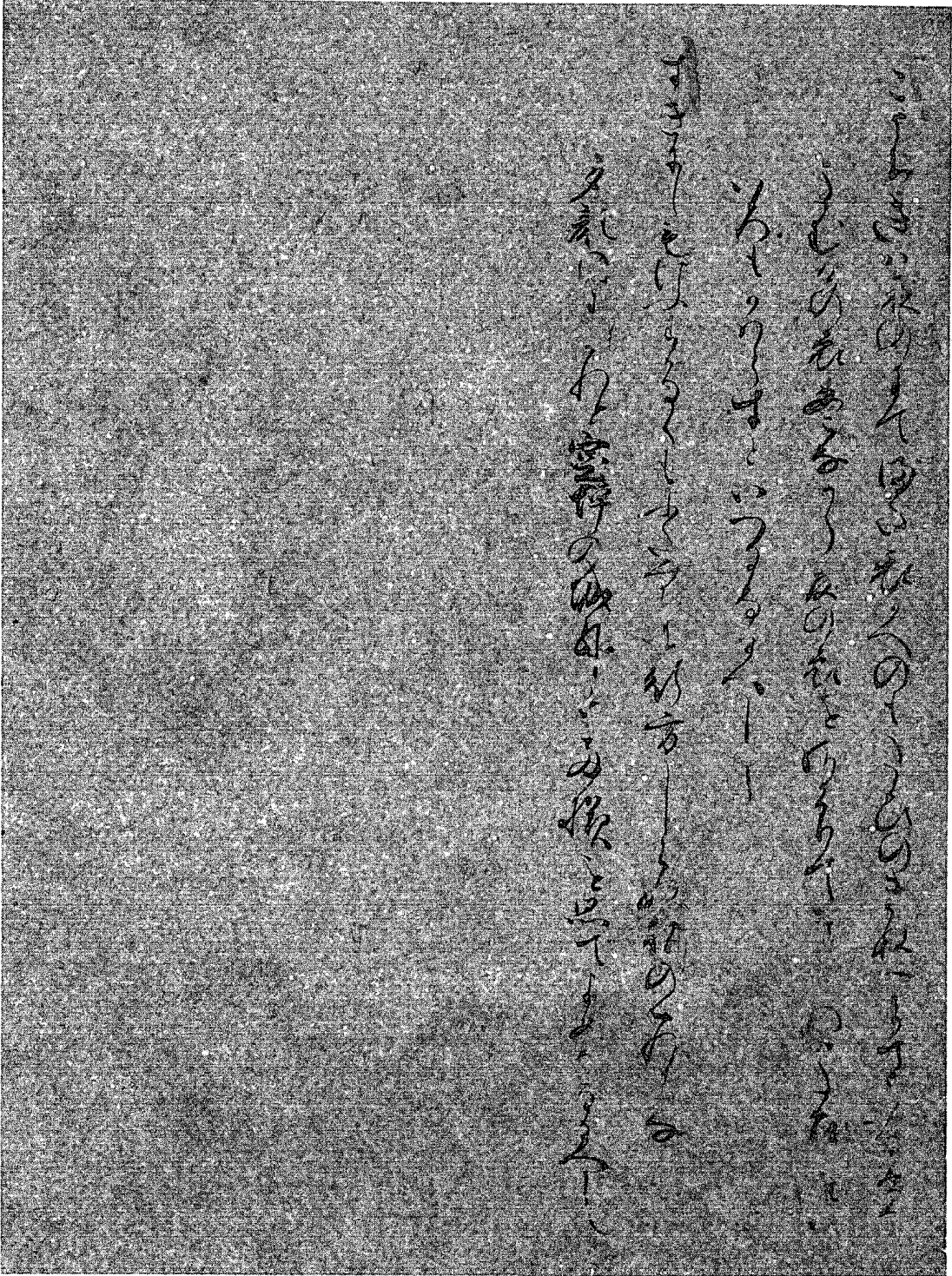
























上りては...  
 下りては...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...



Handwritten text in a cursive script, likely German, written on a dark, textured background. The text is arranged in approximately ten horizontal lines, reading from top to bottom. The ink is dark and the script is fluid and connected.

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

Handwritten text in Japanese, including the phrase "放懐し" (shōkaishi) and other illegible characters.









此の如く、なやりのりんの如

所喜地也幸と地、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

長藤月之故、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

寒山集、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

林乃志、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

かひりく、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

らり、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

疾る、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

論語、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

あ、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

あ、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

あ、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

あ、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國、此の如く言錢氏有國

心をなやまして安んずれば...  
 善世の徳... 善世の善業物...  
 人の心をなやまして...  
 人の心をなやまして...  
 人の心をなやまして...  
 人の心をなやまして...

はひのり...  
...  
これより

軀之申論...  
...  
余一服可...  
...

水...  
...

丹...  
...

...  
...

...  
...

...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...







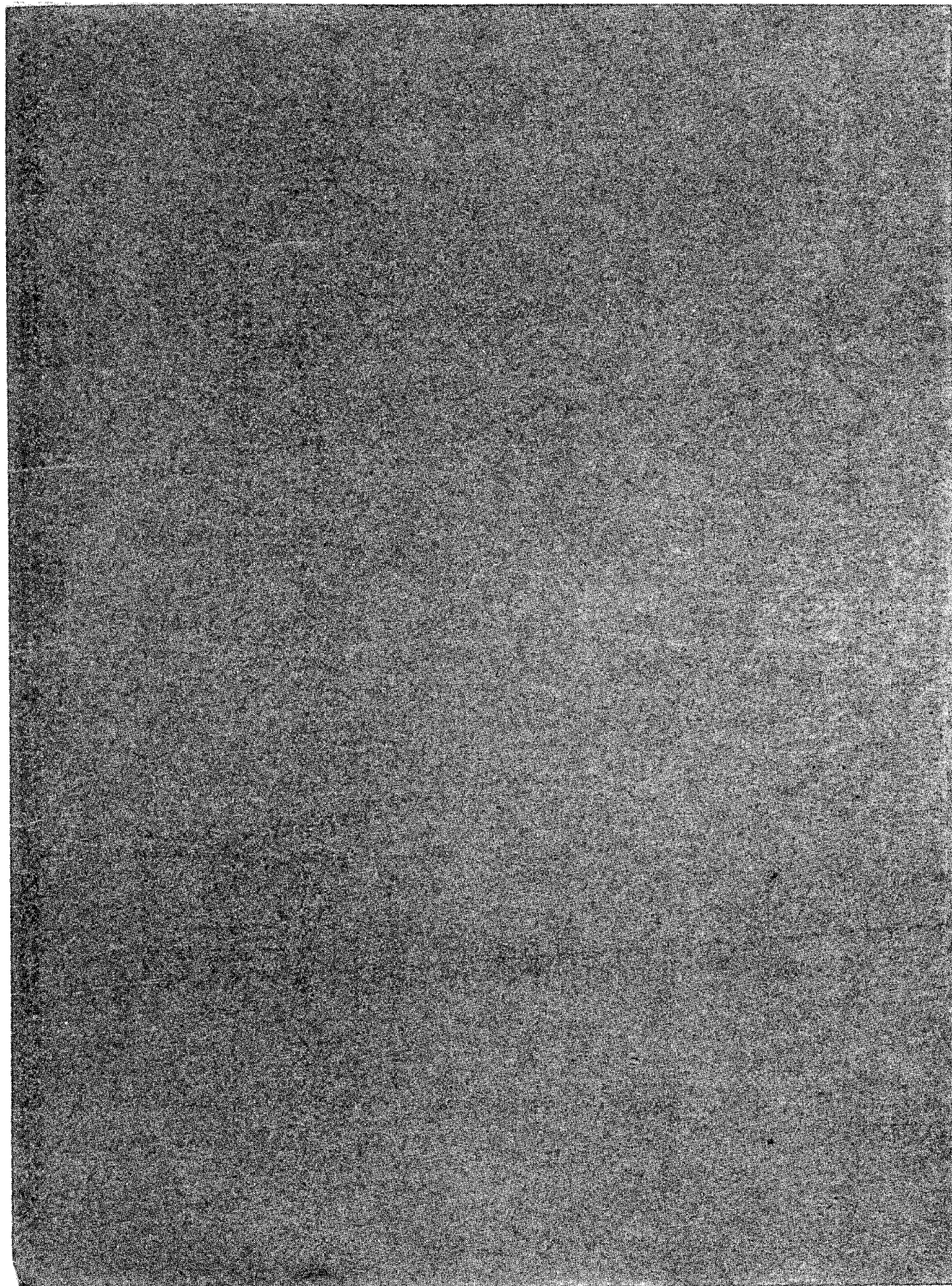
此の文は、  
 1871年12月15日  
 東京府文部省  
 文書課長 藤田鳴鶴  
 宛てての  
 文書である。



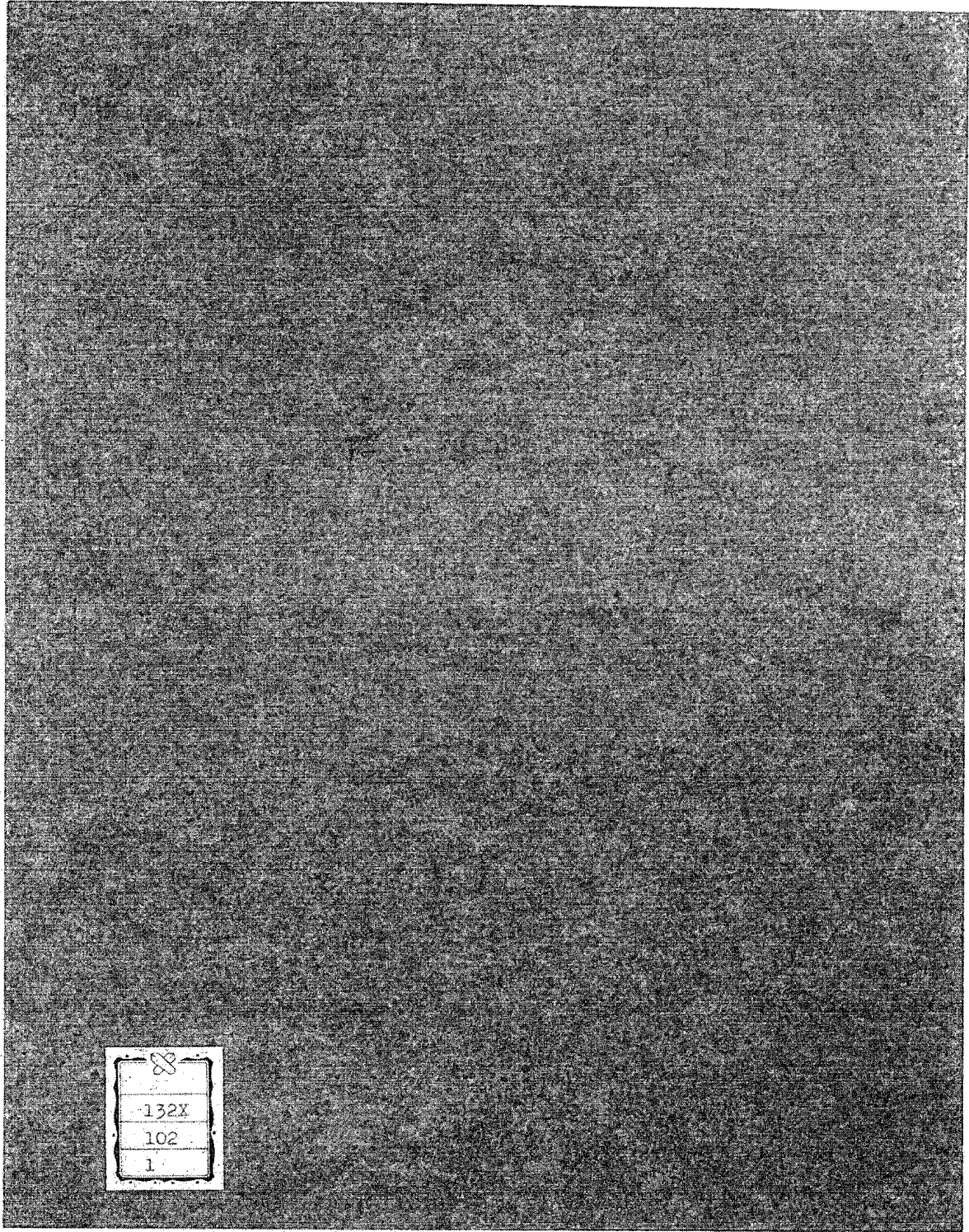




裏見返し



裏表紙



紫明抄序

紫雲寺隱侶素寂撰

みやこの雲をいてゝあつまの月にうそふくよすて人

ありそのかみはとのもりのつかさのすけにましはりておほき

むつのくらゐをけかすといへともいまは身いやしくして

ふてのはやしをのかれ心かたくなにしてことの葉ヒのそ

のにうとしかなしきかなうきよをいとふはかり事あさ

くうらめしきかなまことのみちをねかふ心おろそかなるこ

とをこの思にたへすいさゝかむらさきの雲あるてらを

ひらきてわつかに身をかくすすみかとせりこゝに□□□

き家のかせをあふきてとこしなへに光源氏物〔語〕□□□

あそふくせつけり〔さ〕□□□ろかなる□□□□□□□□□□  
〔二オ〕

かひてなましゐに和漢の口傳をあ〔ら〕□□□□□□□□□□

とも才すくなければ嬰兒のいとけなきに「も」事□□□□

とふらひ藝おろそかなれば老嫗のおほゝれたるにも「ふ」□□

きこと葉をたつぬこれすなはち杜預か傳癖につかれし

つるにふてにつけてかきにしるす徳あらはれたり

素寂か源癖をなやむあにほたるをあつめてともし

ひをかゝくる譽※なからんやたゝ牛毛のいつはりをなため

てよく鱗角のまことをなさしむるものなりかるかゆへに

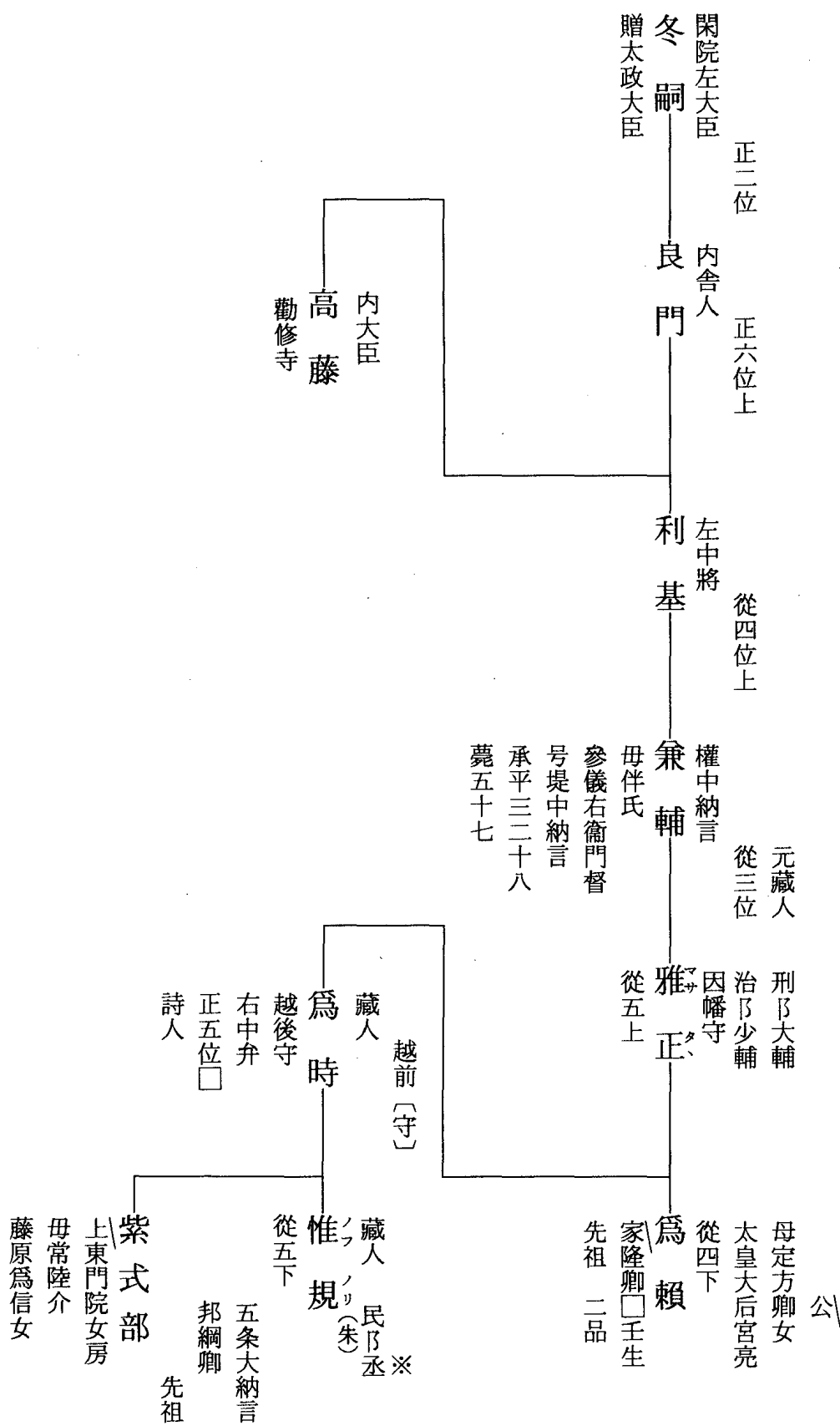
むらさきの色をましまとひのやみをはるけんかため

にこれをえらふなつけて紫明抄といふむそちの詞の露

をしたてゝとまきの玉の光をみかきいたせる事しかり」(二ウ)

○紫明抄卷第一

自桐壺卷  
至末摘花  
(朱、以下同)



紫式部

元藤式下 光源氏物語制作本主也

依爲紫上思案殊勝号紫式下而已

従一位源倫子家女房

倫子

御堂關白北方

一条左大臣源雅信女

相繼与侍



(二才)

(二行分破損)

●光源氏物語卷第一桐壺 一名壺前栽

(朱、以下同)

●桐壺 淑景舎 ●藤壺 飛香舎 ●梅壺 □□□

●梨壺 昭陽舎 ●雷鳴壺 襲芳舎 ●貞觀殿 弓場殿

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給なかにいと

やむことなきはにはあらぬかすくれてときめき給有けり

●問云いつれの御時にかといへるおほつかなし例にひき申

へきみかといつれそや

●答云醍醐の帝の御子にこそ朱雀院と申御名もお

はしませ又高明の親王も源氏におはしませは延喜の聖主

をやひき申へからむ

●重問云もし醍醐の帝を例とせは朱雀院と申名はに

給へれと皇子もおはしまさゝりき村上の帝の御す」(二ウ)

ゑのみこそさかへ給へれいまの物語には桐壺の帝御位

を朱雀院にゆつり給朱雀院位を冷泉院にゆつり給き

しかれとも子孫おはしまさゝりしによりて位を朱雀院

の御子今上にゆつり給へる事を思ふにまたく延喜の

聖帝をは例と申へからさる歟位次をかうかへて准

據するにいさゝかあひにたる例あり

● 桓武天皇  
嵯峨天皇  
仁明天皇  
文徳天皇

淳和天皇

源光 正二位  
右大臣 左大將

(三オ)

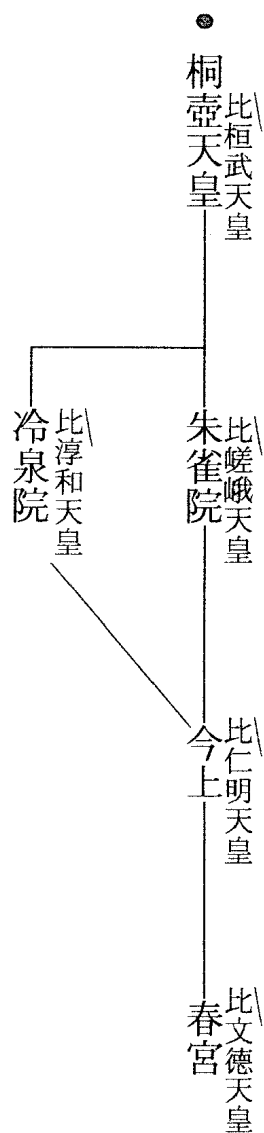
● 光源氏

● 桐壺 天皇  
朱雀院  
今上  
春宮

冷泉院



● かくのことしをのく／＼なすらへて例とせは



● これやかなふへからん源氏は嵯峨天皇の御子にもあまたおはします又仁明天皇の御子西三條右大臣源光卿とてもおはしますうへはこれこそあひかなひて見ゆれ

さは侍らぬか「(三ウ)

● 答云ものかたりのならひすこしきさにたる事ひとつ  
あれは例とする事これおほし○桓武天皇を例とせは  
平城天皇をはいかゝたとへ申へき西三条の右大臣は桓武の御ひゝこにおはしますうへ左遷事きこえず光源氏の左大將の自談には文王の子武王の弟とこそなのられしかたとふるに高明の親王にこそに給へれ醍醐のみかとはは御子なり朱雀院には○弟也大臣の位をとゝめられ

て大宰權帥にうつされてめしかへされ□のちもとの宮に

いつかれ給ひしそかし光源氏君左大將をはなたれて

すまのうらわにしつみ給しかみかとの御夢にす□はれ

□うかひいて給てのち大上天皇の尊号をえ給へ□□□

こしきあひにたる例也又桐壺の卷に□□□□□□□□(四才)

ま人にみせ給時宮のうちにめさん〔事〕□□□□□□□□

との御いましめあれはとて鴻臚館につ□□□□□□□□

武よ□宇多には十代の御よをへたてたるに□□□か

てかゆくすゑの例をかねてしるし侍るへきや又繪合

の卷に朱雀院のみかと〔よ〕り秋好中宮に御繪をたてま

つらるゝ所に延菴の御てつから事の心かゝせ給へるに

又わか御よの事ともかゝせ給へるまきにかの齋宮

のくたり給し日の大極殿の儀式御心にしみておほし

めしければかくへきやうくはしく仰られてきむもちかつか

うまつれるかいといみしきをたて〔ま〕つらせ給へりと侍うへは

時代にうたかひなきにや又明石巻に入道あいなくうち

ゑみてなにかし延<sub>ヒ</sub>のみかとの御てよりひきつたへ」(四ウ)

侍事三代になんなり侍ぬるといふによらは桓武の時

代あえて證據にかなふへからすたゝあふきて延<sub>ヒ</sub>の聖

代を時代にはたて申へきなりといふにかさねたる問答とゝ

まりにき

● うつゝとも夢ともえこそわきはてねいつれの時をいつれとかせん

花山院御製

### 女御事

● 雄略天皇七年求<sub>ニ</sub>稚<sub>ワカ</sub>媛<sub>ヒメヲ</sub>爲女御

後漢書云以備内職焉后正位宮闈同躰天王八十一女御□于

王之燕寝御謂進御於王也 比八十一之士 周礼曰女御綏於之 燕寝以歳(時)

獻功

### 更衣事

● 仁明天皇御宇承和三年正五位上紀朝臣乙〔魚〕□□□□□□□□□□ (五才)

為更衣 ● 漢書孝章云更衣者便殿也闈□□□□□□□□□□

〔殿〕寝者陵上正殿便殿寝側之別殿更衣也 注□□□□□□□□□□

侍常權主衣裳

● 史記外戚世家云衛皇后字子夫生微牟蓋其家號□衛

氏出平陽侯邑□厥子夫爲平陽主謳者武帝初即位數歲無子

平陽主求諸良家子女十餘人飾置家武帝被霸上還因過

平陽主々見所侍美人上弗說既飲謳者進上望見獨說衛

子夫是日武帝起更衣子夫侍尚衣軒中得幸上還坐驪

甚賜平陽主金□千斤主因奏子夫奉送入宮子夫上車

立后事 後漢書

● 周礼云王者立后

● 鄭玄注礼記曰后之言後言在夫之後也」(五ウ)

● 三夫人 夫人坐論婦礼

● 鄭玄注周礼云夫人如三公從容論□礼

● 九嬪掌教四德

● 九嬪比九卿周礼「曰」九嬪掌婦學之法以教九卿也四德謂婦德

婦言  
婦容婦功也

● 廿七代婦主知喪祭賓客

● 婦服也明其能服事於人也比廿七代ヒ大夫周礼代婦掌祭礼賓

客喪〔紀〕之事祭之日陳女宮之具内着之物掌弔臨卿大夫

之喪也

いとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるを

●あつしう 匹也 劣也

かむたちめうへ人なともあいなうめをそはめ〔つ〕□□〔六オ〕

●無愛也 ●側目也 長恨哥傳云京師長吏爲之〔側〕□

もろこしにもかゝる事のおこりにこそ世もみたれ□□

かりけれとやうくあめのしたにもあちきなう人のもてなやみ

くさになりてやうきひのためしもひきいてつへくなりゆ〔く〕□

●唐玄宗皇帝楊玄琰かむすめ楊貴〔妃〕をおほしめして

よのまつり事を楊國忠 楊貴妃かせうと也 にまかせてしろし

めさす安祿山といふ人いくさをおこして陳玄礼といふ

もの楊國忠ならひに楊貴妃をころしつ 此例をいふ歟

みこさへむまれ給ぬ ●光源氏 六条院 降〔誕〕事也

一のみこは右大臣の女御の御はらにてよせおもくうたかひなき

まうけの君とよにもてかしつきこゆ

●よせ 縁也」(六ウ)

なに事もゆへあることのふしくにはまつまうのほらせ給

●まうのほる ●昇進也 ●参昇也 万葉集 「参」進 日本記 ●馳上 同

坊にもようせすはこのみこる給ふへきなめりと一宮の女御は

おほしうたかへり

●坊 春宮居所 ●ようせすは 不能也

この御方の御いさめをのみそ

●諫 いさめこと也

おとしめきすをもとめ給人はおほく

●なをき木□まかれる枝もあるものを毛をふきゝすをいふかわりなさ

●これは高津のみこの述懐哥也詠吹毛求疵文 漢書

●所好則鑽皮出其毛羽二所惡則洗垢求二其癩痕一 家語

●好生毛羽惡生疾 文集 「(七オ)

おほむさうしはきりつほなり

●さうし 曹司也 ●きりつほ 桐壺也

まうのほり給にもあまりうちしきるおりはうちはし

わた殿こゝかしこのみちにあやしきわさをしつゝ御□□□  
むかへの人のもきぬ裳衣のすそたえかたくさかなき事とも

おほかり

●天曆曆御時宣耀殿女御 小一條左大臣師尹公女 芳子 与安子中宮 九条

〔右〕大臣師輔公女 不快其間不調事多之謂彼例歟 古人注如此

えさらぬみちの「と」ゝもをさしかため ころらうてんに

●戸也 ●後涼殿也

みこみつになり給ふとし御はかまきの事

●光源氏三歳御着袴事〔七ウ〕

けちめ ●結目也 えにくみあへ給はず ●吉住吉スミノエ 日吉ヒエ

そのとしのなつ宮す所 はゝ君なくくそうして

●御〔息〕所也 ●奏也

〔こ〕とにいてゝもき□えやらす なよくと

●緯也 ●柔と也

われかのけしきにてふしたれば

●夢にたになにかもみえすみゆれと「も」われかもまとふ戀の

てくるまのせんし

すほう

●輦車 宣旨

●修法

源氏君みつにてはゝにをくれ給 ●例

●昌子内親王

朱雀院姫宮

御母王女御瀬子

文彦太子一女

保明

母左大臣時平女

三歳にして〔母〕におくれ給ふ〔八才〕

みこはかくても御覽せまほしけれとかゝる程にけ給れ□□

き事なればまかて給なんとす

●無服〔殤〕暇事

法曹至要抄

●暇寧令云無服之殤生 三月ヨリマテ至七歳ニ本服○三月給暇三日一月

服二日七日报一日義解云謂〔未〕ル成一人ニ死ル曰殤謂其於ニ五月

以上服親ニ無ク服之殤故唯云ニ本服三月一

●案之生三月至七歳本服三月已下可有之其於五月以上

服〔親〕無ク服之殤故隨彼本服宜有此暇限牟

●問云人生七歳無〔服〕之殤也而光源氏三歳而喪母退出何故哉



● 答云雖爲無服之殤大神事時不似例人故退出云々

おたきといふ所にいかめしうそのさほうしたるにおはしつき  
たる心ちいかはかりかはありけん」(八ウ)

● 贈〔正〕一位源氏清和天皇外祖母在山城國愛宕墓 見延喜式 事

むなしき御からを見るく猶おはする物と思かいとかなしければ

● うつせみはからを見つゝもなくさめつ深草の山煙たにたて 古今僧勝延

□ひになり〔給〕はんを〔見〕たてまつりて

● もえ〔は〕〔て〕ゝ灰となりなん時にこそ人〔を〕思のやまむ〔こ〕にせめ 拾遺

いまはなき人とひたふるに思ひなりなんとさかしうの給つれと

● ひたふる 敢死 万 永 甚振 ヒ 一切 頓 日本記

● みよしのゝたのむのかりもひたふるに君かゝ□にそよるとなく

なる

みつのくら〔ゐ〕をくり給よしありその宣命よむなんいとかな

しきわさなりける

● 〔贈〕三位例事 可考之

女御とたにいはせすなりぬるかあかすくちおしうおほ〔さ〕□□ (九オ)

れはいまひときはをたにとてかくせさせ給なりけり一階也

問云大臣女を女御といふにや大納言の女いかてか女御

□□はるへき例ありや

● 答云〔其〕〔例〕非一かつく二三をあくへし

● 延喜御宇藤原和香子爲女御大納言定國女 皇子女御号堀川女御 兼通公女

兼通公于時宮内卿也皇子女后是也円融院女御

● 贈皇后宮藤原超子〔三〕条院母后 〔兼〕家〔公〕女 安和元年十二月七日

爲女御 ● 父于時藏人頭也未爲〔正〕員公□之女爲女御事

〔さ〕まあしき御もてなしゆへこそすけなう物□給しか

● 無人望也

なくてそとはかゝるおりにやとみ〔え〕たり

● ある時はありのすさひにくかりきなくてそ人は戀しかりける〔九ウ〕

見たてまつる人さへ露けき秋なり

● 人は□さことそともなきなかめに□我は露けき秋もしらるゝ後撰

野わきたちてはたさむき夕くれの程つねよりもおほしいつ

〔る〕事お〔ほ〕くてゆ〔け〕□の命婦をつかはす

● 令曰謂婦人帶五位以上爲内命婦〔也〕五位□上妻曰外命婦也

人よりはことなりしけはひかたちなどのおもかけにつとそひて

おほさるゝもやみのうつゝには猶をとりけり

集ツト 日本記詞

むはたまの〔や〕〔み〕のうつゝはさたかなる夢にいくらもまさらさり

けり

やもめ菱すみなれと人ひとりの御□しつきにつくろひたてゝめ

やすきほとにてすくし給へるをくれやみにてふしゝつみ

給へる程に草もたかくなり」(二〇オ)

● 大般若經云善現當知如有女人端嚴巨富若無強夫所

攝護者易爲惡人之所凌辱

野わきにいとゝあれたる心ちして月かけはかりそやへむ

くらにもさ□□〔す〕さし入たる

● とふ人もなきや〔と〕なれとくる春はやへむくらにも〔さ〕はらさりけり

三條右大臣家 屏風貫之

● やへむくらしけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり

拾遺 惠慶

けにえたふましようない給ふ

●一眉〔猶〕巨耐雙□定傷人

遊仙窟

いのちなかさのいとつ□う思ふ給へらるゝに

●庄子曰壽 イロロキモノハ、ロヲホシ 則 多 辱

松のおも□ん事たにはつかしう侍れは」(二〇ウ)

●いかにして有としられしたかさこの松の思はん事もはつかし

くれまとふ心のやみもかたへはる「ゝ」□かりなん

●人のおやの「心」「は」やみにあらねとも子を思ふみちにまとひぬる哉

拾遺※  
兼輔

いとゝし「く」虫のねし「け」き「あ」さちふに露おきそふる雲の上人

●後撰云母の服□て「き」とに侍ける比醍醐のみかと「よ」り

無常の御文給はりける御返事に近江更衣

●五月雨にぬれにし袖をいとゝしく露をきそふる秋のわひしさ

御くしあけのてうとめく物そへ給 調度也

すか／＼と「も」□まいらせたてまつり給はぬなりけり

●速々也

長恨哥の繪亭子院のかゝせ給て伊世貫之によませ給へるや

まところの葉をもゝろこしの哥をもたゝそのすちをそ」(二一オ)  
まくらことにせさせ給

●伊せ集にいはいく長恨哥の繪の御屏風亭子院に□らせ

給〔て〕所々の名をよませ給けるに御門の御手にて

●もみちは〔の〕色にわかれすふる物はもの思ふ秋の涙なりけり

●まくらこと あけくれのことくさのよし也

かのをくり物御覽せさすなき人のすみかたつねいてたりけ  
んしるしのかむさしならましかはとおほすもいとかなし

●指〔碧〕衣女取〔金〕釵鈿合各折其半授使者曰爲我謝太上

皇謹獻是物〔尋〕舊好也 長恨哥傳

繪にかけるやうきひのかたちはいみしき繪師ゑしといへともふて

かきり有ければいとほひすくなしたいえきのふよう

ひやうのやなきも朱けにかよひたりしかたちいろあひか」(二一ウ)

らめいたりけんよそひはうるはしうけふらにこそはあり

けめ ●なつかしうらうたけなりし有さまは〔お〕みなへしの風

になひきたるよりもなよひなてしこの露にぬれたるよ

りもらうたくなつ□し□りしかたちけはひ□おほしいつる  
に花とりの色に「も」ねにもよそふへきかたそなき

● 歸來池菴皆依舊太液芙蓉未央柳 長恨哥

● 芙蓉 荷一名也

● おほよそ源氏物語□いふものあまたある中に光源氏

物語といふは紫式<sub>β</sub>君のしわざ也しかるを亡夫大監物

源光行か家につたへ來れる本むかしよりよみつたふる

説々みたりかはしきによりて人のまよひをたすけ世

のさま□けをた々さむかために句點をきり隸字<sup>\*</sup>「(二二オ)

をつくといへともわたくし有に々たり故実の人にとふ

らはんと思て五條の三品俊成卿の亭にまかりむかひて此事を

談へきよし申におほきに「よ」ろこひてとし比我ねか「ふ」

所この事に□□□て暮年に功を々へたり其間したかひ

つかへたるもの「た」々親行ひとり日を々かすこ々に三品俊成卿の

本桐壺卷をひらきみればゑにかけるやうきひのかたち

「は」いみしきゑしといへともふてかきり有ければいとほひ

すくなしたい「え」きのふようひやうのやなきもとかきて  
ひやうの柳とい「ふ」一句□見せけちにせりすなはち親行  
を使として申やりける楊貴妃をは芙蓉と柳にたと

へ更衣をはをみなへしとなてしここにたとふみな二句

つゝにてよくきこえ侍を御本に未央柳「を」けたれ「(二二ウ)  
たるはいかなる子細の侍そやと申たりしかは我は□かてか  
さる自由のわさはし侍へき侍従大納言行成卿一筆本

にこの一句を見せけ「ち」にせり紫式部「同」時の人に侍

れは申あはするやう「こ」そ有つらめとてこれも墨をつ

けては侍れ「と」「い」ふかしさにあ「ま」たゝひ見し程に若菜

の巻にて心をえておもしろく見「な」して侍なりと申され

けるを親行かへりてこのよしをかたるに若菜弓には

いつくに思あはせられたるとか申されしといふに□□

まてはたつね□さすと答時人の使は問答いふかしから

ぬをこそ専使とはいふに汝道理をわすれたる不覚の

事也すみやかに見あきらめて不審をひらくへし

と申されてことほりなれば親行とちこもりて若菜」(二三オ)

局をひ「ら」き見る事六十遍にをよひて其心を

えたり朱雀院の五十の御賀を六條院の御さた

としてとりをこなはれ「し」時女試樂に院人「く」のあり

さまをよろつものに思よそへられし時宮女三宮也の御方

をのそき給へ□人「よ」りけにちゐさくうつくしけに「て」

たゝ御そのみある心ちすにほひやかなるかたはをく

れたゝいとあてやかになまめかしくて二月の中の

十日はかりのあ「を」や木のわつか「に」したりはし「め」たら

ん心ちして鶯のはかせにもみたれぬへくあえかに

見え給さくらのほそ「な」かに御くしはひたりみきより

□ほれかゝりてやなきのいとのさましたりとかける

にはしめの未央の柳はようなき物とみつやかて」(二三ウ)

父にかたるにみやこの好士さま「く」お「ほ」「か」れとこの

三品の和才すくれたる中にこの物語をあきらか

にもてあそふ人た「く」ひなきかゆへに逸興をみたて



られたるなるへしとてこの一句をみせけちにし

侍しかは愚本もおなしく見せけちにし侍也

はな鳥の色にもねにもよそふへきかたそなき

●花鳥の色をもねを「も」いたつらに物うかる身はすくすなりけり

後撰  
雅正朝  
□歟※

はねをならへえたをかはさんとちきらせ給しに

●在「天」願作比翼鳥在地願爲連理枝

長恨哥

ともし火をかゝけつくしてお□おはします

●夕殿螢飛思悄然秋燈挑尽未能眠

長恨哥

右近のつかさのとのゐ○のこゑきこゆるはうしになりぬるなる

へし「(二四才)

●亥一剋左近衛「夜」行官人初奏時終子四剋丑一剋右近衛

宿申事至卯一剋「内」豎亥一剋奏宿簡

あしたにおきさせ給てもあくるもしらてとおもほしいつ

●玉簾あくるもしらすねしものを夢にも見しと思かけきや

詠長恨哥  
伊せ

あ「さ」まつり事はをこたり給ぬへかめり

●春宵苦短日高起 從此君王不早朝

長恨哥

あさかれる

● 朝餉間在清涼殿

たいしやうし

● 大床子のをものは皇居にしたかひてうつさる

はいせむにさふらふかきりは

● 陪膳役人者殿上四位勤也」(二四ウ)

たうりをもまけさせ給しに ● 枉道〔理〕也

いとたいくしきわさなり ● 退々也

ひとのみかとのためしまてひきい□ ● 他國の帝と□ふ也

あくるとしの春坊〔さ〕たまり給にも 朱雀院也 春宮立坊也

かのおはきたの〔か〕〔た〕

● 祖母

おほはといふ ● 見具于令

● 拾遺云源重之〔か〕母のあふみのこふに侍けるにむまこの

あつまよりうちのほりていそく事侍てえこのたひあ

はてのほりぬ〔る〕事といひて侍ければおはの女ののよみ侍ける

● おやおやおやと思はましかはとひて□し我子のこにはあらぬなりけり

なつになり給へは御文はしめ

●光源氏御書始事」(二五才)

わさとの御学問をはさる物にてはかなきことふえのねに

も雲居をひかし給

●箏柱附 蒼頡篇云

組研反俗云 象乃古度

形似瑟而短有十三絃玩璃々譜

云柱

高三寸 和名古度遲

横笛

律書樂圖云々

音韵

和名 与古不江

本出於羌也

漢張騫使西域首傳一曲

高麗人

こまうとのまいれりけるなにかしこきさう人ありけるをき

こしめして宮の内にめさん事は宇多のみかとの御いましめあれは

いみしうしのひやつして「こ」のみこを鴻臚館ころろくわんにつかはしたり

●寛平遺誠云外蕃之人「必」所召見者在○簾中見之不可直對耳李

環朕已失之愼之クワン ツハシメ

●鴻臚館 いまのよつ□也 異國人來朝之時停九重之出入

於此所有問答」(一五ウ)

●漢書云鴻臚寺周礼大行人中大夫掌大賓之礼及大客之儀小

行人下大夫掌邦國賓客之礼籍以待四方之使者至秦曰

典客一漢書百官表云典客秦官掌諸侯歸誼蠻夷秩

中□□石景帝更アラ名タメテ曰大行人タメテ之武帝改曰大鴻臚王莽改曰

〔典〕樂タメテ胡廣漢官解詁云鴻聲臚傳也所以傳聲ツタヘテナラ贊サンタウ導九賓ツタヘテナラ

也

御うしろみたちてつかうまつる右大弁のこのやうにおもはせてゐてた

てまつりたるにさう人おとろきてあまたゝひかたふきあやしふ

くにのをやとなりていわうのかみなき位にのほるへきさう物し給

人のその□たにて〔み〕〔れ〕は□たれうれふる事やあらんおほ(墨)をやけのかためと

なりて天下をたすくへきかたにて見れば又そのさうたかふへし

といふ

●光孝天皇嘉祥二年渤海國入一觀大タメテ使王一文一タメテ知望タメテ見天皇タメテ（一六オ）

在ニ諸親王中一拜起之儀タメテ謂テ所親ニ曰此公子者至貴之相サウ(ナレルナム)ノホラムコト其登天タメテ

位ニ必ナラシ矣

●史記曰韋丞相賢者魯人也・以讀書術タメテ爲レ吏至大鴻臚・有相工タメテ

相レ之・當レ至丞相ニ〔有〕男四人一使相シム之至第二子其名玄成相公曰・此

子貴當封セラル侯ニ

さえ ● 才 ● 伎 いとけうありける ● 興

あはれなるくをつくり給 やまとさう

● 句 ● 和相 わかくにゝて「見」なれたる相といふ心なり

むほ〔ん〕□親王のけさくのよせなきにてはたゝよはさし

● 無品 ● 外戚 ● 無縁 よせなき

たゝひとにて ● 凡俗

みことなり給なは世のうたかひおひ給ぬへく物し給へはすく宿 (一六ウ)

えう曜のかしこきみちの人にかうかへさせ給にもたゝ〔お〕なしさま

になん申たりければ源氏になしたてまつるへくおほしをきて

たり

● 貞觀七年授蜀王恪齊州都督太宗謂侍臣曰父子之情豈

不欲常〔相〕見邪但家國事殊〔須〕出作藩屏且令其早〔有〕〔定〕

分絶覬覦之心 覬覦者希望也

きさいの宮

● 後漢書云周礼〔曰〕王者立后 鄭玄註礼記曰后之言後言在夫之後也故姿〔見消チ〕〔以女〕ト傍訂 謂後達

うけはりてあかぬ〔事〕なし こよなうおほしなくさむ

● 諸諾 ウケハル

● 無越 コヨナシ

● 閑雅 コヨナシ

● 幽玄之儀也

御あたヒ□りさけさせ給はぬ程に よの人ひかる君ときこゆ

● 不遠也

● 敦慶親王

亭子院御子・母同延喜帝  
号玉光宮好色人也

「(一七オ)

ふちつほの御お「ほ」えとりくくなる○にやかやく日との宮ときこゆ

● 榮花物語第八云中宮彰子

道長公女  
上東門院

のまいらせ給しおりこそ

かやくふちつほとよの人申けれ

〔十〕二にて御元服し給

醍醐

● 延喜七年二月十六日當代源氏二人元服垂母屋壁代擬晝

御座其所立倚子御座孫庇第二間有引入左右大臣座其南

第一間並円座二枚爲冠者座

並西南又円座前置円座  
又其下並理髮具皆盛折節(柳宮敷)ト傍訂

先両大臣

被召着各着円座引入從〔還〕着本座次冠者二人立座退下

於〔侍〕所改衣装此間両大臣給祿於庭前拜舞不着從仙華

門退出於射場着沓擬祿次冠者二人入仙華門於庭中拜舞

退出參仁和寺歸參

● 宸儀御侍所倚子親王右大臣※已下近臣※同候有盃酒御「(一七ウ)

遊両源氏候此座候四位親(王)之次  
依仰也奥方壁下也深更大臣已下給祿両源氏

宅各調長食屯歟廿具令分諸陣所早

朱雀

● 屯食ツ、ミイキ(朱)事天慶三年親王元服曰内藏寮十具穀倉院十トムシキ(朱)

具已上檢校太政大臣仰之調之衛門府五具督儲之左〔馬〕

寮五具御監仰儲之

● 南殿版位東其東春興殿曰五辛櫃十合件ホ物有宣旨

自長樂門出入〔上〕卿仰弁官分給所ト史二人勾當其事

仰檢非遠使分給弁官三太政大臣二左右近三具左右○衛二兵

左右衛門二□人所二内記所一藥殿御書所内豎所校書

殿作物所各一内侍四采女一内教坊一糸所一御匣所一

みたちおほしいき※つき きしき

● 居起也 ● 勞也 ● 儀式也〔二八オ〕

ところくのきやう くらつかさ こくさうゐ

● 所々饗也 ● 内藏寮也 ● 穀倉院也

てむのひんかし こいし 火さ□〔御〕〔座〕冠者也 おもてはいしたてまつり○給

● 殿東也 ● 御倚子也 ● 拜也

きひわなるほと

● 稚きひわ いとけなき也

ひ左きいれの○大臣みこはらにたとひとりかしつき給御葵上むすめ

〔春〕朱雀院宮〔よ〕り〔も〕御けしきあるをおほし〔わ〕つらふ事有ける

〔こ〕の君□たてまつらんの心ふかきなりけり

● みこはらの事

● 攝政左大臣の北方は桐壺の帝の御一腹の女三宮にてお

はしますゆへに葵上をみこはらといふ致仕大臣をは」(一八ウ)

宮はらの中將と申し也

うへ主上に御けしき給らせ給ければ御ときよくてさらはやかてこの

お□のうしろみなかめるをそひふしにもともよほさせ給

● 延喜十二年十月廿二日故〔左〕大臣女參俗謂副臥見李<sub>王</sub>記

● 寛和二年七月十六日三條〔院〕于時 東宮御元服同日立太子年 十一

法興院大相國女尚侍綏子爲副臥見大鏡

さらひひ 御みきなとまいる

● 殿上を内のさふらひといふ ● 酒也ミキ 飲酒去邪風三寸 三寸也 故云三寸

せむし〔う〕け給はり〔つ〕たへて ろくの物 うへの命婦



● 宣旨也

● 祿物也

● 祔候内裏命婦也

しろきお「ほ」うちき御そひとくたり

● 袷 ウチキ 袷敷 有大「小」宮一ミヤの用人之又あるし□おほしき人」(二九オ)

もちゐる也きぬのうへにうはき おめらかしたるうへ「は」「を」り物 なかへうらはひとへもんのみへ也

きぬの色にしたかひたるにほひなりきぬには二寸はかり

をとるへしうはきのうへにうちきいろかさねは□れもうは

きのことし「寸」法のをとりたる也小袖のなかさなるへし

いとぎな「き」はつもとゆひになかきよをちきる心はむす

ひこめつや

● 稚形 イトキナキスカタ 日本記詞也

ゆひ「そ」むるはつもとゆひのこむら「き」き衣の色にうつれと思ふ

むすひつる心もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあせず「は」

● 今日よりはあ「ま」のかはらはあせなゝんそよみ水ともなくたゝわたりなん 後撰

● 拾遺云三善佐忠元服のゝち能宣※

なかはしよりおりてふたうし給」(二九ウ)

● 長階

● 舞踏事

● 再拜次左右左次伏左右左居揖後立再拜次小揖

今案先立小揖次再拜次〔置〕笏於左地立左右左〔次〕伏左

右左取笏居揖次立再拜次小揖退出已上内院之儀也他

所只再拜退出 北山記

ひたりのつかさ〇御馬 乃 藏人所のたかすゑて給はり給

● 左馬寮御〔馬〕也 ● 御鷹は藏人所の所役なれば也

おりひつもの こもの としき ろくのからひつ

● 折積物 クタモノ也 ● 籠物 ● 木物とも ● 屯食 ツ、ミイキ トムシキ ● 祿唐櫛

女君はすこしすくし給へる程□いとわかうおはすれ〔は〕にけなう 無口氣(口右ニ「似」ト傍訂)

はつかし〔と〕をほしたり おヒ

● 源氏君十二歳葵上十六歳女の御とし四すぎ給へる事〔二〇オ〕

をいふなり

こゝら よろつみなく

● 巨々等 おほき也 ● 無罪

内にはもとのしけいさを御さうしにてこ御息所の御方の

人々まかてちらすはせ給

● 淑景舎 桐壺の殿也 ● 故御息所 桐壺更衣也

さとのとは 木工修理 内匠寮 もくすりしたくみつ「か」さなとにせむしくたりてになくあらためつくらせ給

● さとの殿は 二条院也 桐壺更衣の舊跡也 (二〇ウ)

● 光源氏物語卷「第」二 筥木 ハキキ

ひかるけむしなのみことくしう

● 敦慶親王 〔亭〕子院第四子母同延喜三品式下卿延長八年二月廿八日薨号玉光宮好色人也

しのひ給けるかくろへ事 ● 隱事也

〔さ〕るはいと世をはかりまめたち給 ● 斂色 在遊仙窟

なよひかに ● しなやかなる也

かたの少將には 三品式下卿 らはれ給けんかし

● 英明中將交野に一宿す 宇多一齊世親王一英明

しのふの 三品式下卿 〇たれやとうたかひきこゆ

● かすかの若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられ〔す〕

てうしいて給 ● 調出也

あたら「(三二オ)

● 秋といへはよそにてきしあた人の「わ」れ□ふるせる名にこそ有けれ今古

● あた人もなきにはあらす有な□□我身にはまたきしそならばぬ後撰  
左大臣

雨夜のしなさまため

● 品定シナサタメ ● 考選シナサタメ 日本記

おさく〔轉〕〔了〕也 ● 軌制オサク 日本記 ● 漸オサク 順和名 ● 治天下オサク 匡房卿説 ● 番長オサク 異説

● 日本記云成「務」天皇四年甲戌二月始定諸國境各分郡邑

詔曰四自今以後國郡立長縣邑置首即當國之轉了者任國

郡之首長是爲中區蕃屏

● 又治オサク ● 又優ヲサク

● 古今第九忠峯長哥云

● とのへもる身のみかきもりおさくしくもおもほ「え」す

をのかし ● 各競日本記 ● 又「云」各自恣(二一ウ)

● 万葉第十二丸□

● 各寺師人死ヲノカシ□らしいもに□ひ日□とにやせぬ人にしられす

● 拾遺第七 □十九日藤六輔相哥スケミ(巻)

● 秋風よもの山よりをのか「し」「ゝ」吹にちりぬるもみ「ち」「か」なしな

● 春□梅秋はまかきの菊花をのかしゝこそこひしかりけれ貫之

ゑむすれば おほそ「う」

● 怨うらむる也 大都おほかた すへて 同事也 大惣ともかけり

二のまち そこにこそ

● つ□の心也 ● 足下也

女のこれはしもとなむつくましき

● 「難」をつくましきなり

「す」□ふによろし「き」もおほかり ● 随分也(二三オ)

おやなとたちそひもてあかめておひさき尖ヲ「ヒ」サキこもれるま窓と

のうち「な」る程

● 楊家有女初長成養在深窓人未識長恨哥

たゝかたかとをきゝつたへて片廉也 ● 片才カタナド 日本記

おほとき隠 ヲホトカナリ いうなり ● 優 しねんに ● 自然也

そのけはひこよなかるへし くらゐみしかくて人けなき

● 景氣 ● 閑雅 コヨナン 幽玄之儀也

● 位卑 選初令曰 ● 位下也

なほ人のかむたちめまてなりのほり ● 直人也 地下之輩也

よにふるたつき ● 便タツキ すりやうといひて 受領也

きさ「み」くありて中のしなのけしうはあらぬ

● 品々也 ● 「不下」習 フケシウ ケシウハアラス ● 「不」恠 トモカケリ

なま／＼のかむたち「め」 (二三ウ)

● なまめきたる □ なみ／＼とも心うへし ま手み可通音故也

非參議の三四位とも

● 位はかりにて無官を非參議といふ ● 散位ともいふ

かはらかなりや ヒヒヒヒヒヒ(朱) すへてにきはしきによるへきなより

● なまめかす きよけなりといふ歟 ● 富饒

きすなきかたのえらひにこそをよはさらめ

● なをき木にまかれる枝もある物を毛をふきすといふかわりなさ

高津のみこ述懷詠吹毛求疾

かしこし□てもひとりふたりよの中をまつりこちしるわさ

ならねはかみはし□にたすけられしもはかみになひき

て事ひろきにゆつろふ□ん

● 上以風化下々以風刺上主而クエツカム譎諫言之者無罪聞之者是イッハリ」(二三オ)

〔以〕戒毛詩序

● 上含淳德以遇其下々懷忠信以事其上史記秦本記

● 上爲敬則下不慢□〔好〕讓則下不爭上之化下猶風靡草孝經

とあれ□□□りあふさきるさにて

● しかりとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

すきくしき心のすさひ いふかしき

● 数奇くしき也 ● 未審也

こと言はりをし すへなくまたせ

● 撰言也 ● 焉※スヘナキ無タヨリナキ也 ● 無便スヘナシ 万 ● 無爲スヘナシ

これをはしめの〔な〕〔ん〕とすへし ● 難也 ことかなかに ● 〔緯〕也

まめくしきすちをたてゝ□ゝはさみかちにひんさうなきヒ

いゑとうし」(二三ウ)

● 真々也 ● 無貧相也 ● 主人女イニトウシ 遊仙窟

あはつかに ひたふるに こめきやはらかなる

● 淡々たる也 あはくしき 詞也 ● 永也 くはしき也 ● こめかしき詞

えむにものはちして うへ「は」つれなくみ「さ」ほつくりて

● 艶也 ● 操也

かくはた ● 將也 ハタ(朱) ふかきやま□と

● 山さとは物のわひしき事こそあれよのうきよりはすみよかりけり

よはなれたるうみつらなにはひかくれぬかし

● 周〔太〕王太子一泰伯一仲雍一 讓弟季歴一 隱荆蠻海濱 論語

ひたすらに ひとへにと いふ也 ● 太 毛詩 ● 疋〔如〕 文集 ● 永 日本記

● ひたすらと我おもはなくにをのれさへかりくとのみなきわたる覽 後撰

〔ふ〕るこたち ● 後達也 女惣名也 (二四才)

● 後漢書云周礼曰王者立后 鄭玄註礼記云后之言後言在夫 之後故以女謂後達

● 雜藝哥

● 西の京なるこたちはあや千疋かとり千疋くりあけて

○「と」かしのひきすなやぬきひきすなやきりくすのなと をる

かたちからおきのはなや

● 黒鳥子三哥



※みよしのくにかみの宿の後達は 俗云後付

うちひそみぬ ● 嘸 ヒソム ● 屈 ※ヒソム万 ロラスクムレハロノイツル故也

● もとせにおひくちひそむ □ □ ヒヒ ひとつもわれはいとはしこひはますとも 万葉四家持

にこりにしめる程よりなまうかひにてはかへりてあしきみちにもたよひぬへくそ

● はちす「は」のにこりにし □ ぬ心もてなにかは露を玉とあ □ むく 古今 遍照 (二四ウ)

らうたき ● 良也

つなかぬふねのうきたるためしもけにあやなし

● 觀身岸額離根草論命江頭不繫舟

ひたりの馬のかみ物さためのはかせ師になりてひちちるたり

はかせ 師也

● ひちちるたり 軽也 ひえとりのうそをかまふる時のかたち也ともいふ 轉サエツル心也 異本云ひらいたりといへりひらきあるといふ也

おほせを木のみちのたくみのよろつの物を心にまかせてつくり

いたすも

● 明王之任 人如 下 巧匠之制 木 上 直者以爲 轅曲者以爲 輪長者

以爲 棟梁 短者「以」爲 楨 桶 無 曲直長短 各有 所 施 明王之任 人

亦猶如<sup>レ</sup>是也智者取<sup>リ</sup>其謀<sup>ヲ</sup>愚者取<sup>ル</sup>其力<sup>ヲ</sup> 帝範※

りうしのもてあそひ物 ● 臨時也」(二五才)

〔さ〕たまれるやうある物をななくしいつる事 難なくし出也

そはつき ● よしつき そはみたる也

人<sup>ノ</sup>見およはぬほうらいの山あらうみのいかれるい□のすかた

からくにはけしきけた「も」のゝかたちめにみえぬおにのかほ

などのおとろくしくつくりたる物は心にまかせてひとへに人の

めをおとろかしまことにはにさらめとさてありぬへしよの

つねの山のたゝすまひ水のなかれめにちかき人のいゑるあり

さまな□をけにとみえてなつかしきやはらけてしつかにかきませて

すくよかならぬ山のけしきこふかくよはなれてたゝみなしけち 不建(朱) 疊成(朱) 文選(朱)

かきまかきのうちをはその心しらひをきてなどをなん上手

はいといきをひこと<sup>ハ</sup>に<sup>ホ</sup>わる物<sup>ヲ</sup>は<sup>殊(朱) 虚俗キヨシヨクワルモノ</sup>よ<sup>幽(朱) 仙窟文(朱)</sup>は<sup>幽(朱) 字左ニ「遊歎」ト墨傍記</sup>ぬ<sup>コウ(朱)</sup>所<sup>ヲ</sup>お<sup>ハ</sup>ほ<sup>カ</sup>る

● 韓子曰客爲齊王畫者問之畫孰最難對曰狗馬最難」(二五ウ)

孰最易曰鬼魅最易狗馬人所知也且暮於前不可類之

故難鬼魅無形者可類故易

心しらひ・心□かひ也

こゝかしこしてむなかにはしりひき・點長也

な〔を〕〔し〕ちになんよりける・〔實〕也 けうして・興

えたのむましく・吉 づらつえつきて・支願

のりのし・法師 またけろうに侍し時・下臈

かたちな〔と〕いとま〔ほ〕にも侍らす・真帆也

ものゑんし・怨也 □ねんに・自然也

うとき人に見えは・外人不見と可被咲 文集

みさほに・操也 おそまし・形遠 文選

〔わ〕れたけくいひそし侍に・殺也〔二六オ〕

てをおりてあひみしのちをかそふれはこれひとつやは君かうきふし

●てをおりてあひみし事をかそふれは十といひつゝ四はへにけり 伊世語

りむしのまつりのてうかく・臨時祭調樂也

●十一月中午日賀茂にてあるへき樂を内裏にてならさ

るゝ也昔□〔三〕ケ日當時は二ケ日あり北陣に握屋アツヤ(朱)をうち

て臺盤すへて饗を行也勸盃あり賀茂の臨時祭を

北祭と云八幡臨時祭を南祭といふ

まかりあかるゝ所にて ● 頌 アカル

火ほのかにかへにそむけ さうしみはなし ● 正身也

● 歌々残燈背壁影 蕭々暗雨打窓聲 文集

さうそくもなく「て」いとひたやこもりにおほつかなければ

● うきによりひたやこもりと思へともあふみのうみはうちてゝを見よ和泉式部集

消息 アルカタチ 日本記  
アリサマ 文集

いたくつなひきて見せしあひたに

● ひきよせはたゝにもよらて春駒のつなひきするそなはたつ「と」きく

たはふれにくゝなんおほえ侍し

● 有ぬやと心みかてらあひみ「ね」はたはふれにくきまでそ戀しき 古今

たなはたのたちぬふかたをのとめてなかきちきりにそあへ

まし

● あふ事は七夕つめにおなしくてたちぬふかたはあへすそ有へき 後撰 閑院

たつ田ひめのにしき「に」は又しく物あらし

● 見ることに秋にもなるかたつたひめもみしそむとや山のてる覽 後撰

池の水かけみえて月たにやとるすみかをすきんもさすかにて

おり侍ぬかし」(二七オ)

●ふたつなき物と思をみなそこに山のはならていつる月かけ

古今貫之

●雲井にてあひかたらはぬ月たにも我やとすきてゆく時はなし

拾遺伊世

ふところなりつるふえとりいてふきならしかけもよしなとつ

しりうたふ

●あすかる「に」やとりはすへしをけかけもよしもひもさむしみ

まくさもよし 催馬樂 飛井律

よくなるわこむをしらへとへのへたりけるを

●琴有能鳴調

りちのしらへ ●律調也

にはのもみちこそふみわけたるあともなけれなとねたます

●秋はきぬもみちはやとにふりしきぬみちふみわけてとふ人はなし

古今

●妬 ネタマス ●勵 ハケマスナリ (二七ウ)

あされかくれば 箏のことはむしきてうにしらへて

●されたる也 よしはむ也 ●盤渉調也

あくまでされ〔は〕〔み〕すきたるは ● 数奇也

よすか ● 便也 さしすくひたりと心をかけて ● 過也

おらはおちぬへきはきのつゆ

● おりてみはおちそしぬへき秋はきのえたもとをくにおける白露 古今

たまさくのうへのあられ

● いつこにかやとりとる覽あさひこのさすやおかへの玉さくのうへ

すきたはめらん女に□〔心〕□かせ給へ ● 貞節不拾 テイセツ スタハテ 晋書文

おはさうす ● 山かつ ● 桓本 カキホ カキモト也

● おはします也 ● 物思しらぬ物をいふと 俊頼口傳ニアリ

ちりをたになとおやの心をとる〔二八オ〕

● ちりをたにすゑしとそ思さきしよりいと我ぬるとこ夏の花 古今 射恒

うちはらふ袖も露けきとこ夏にあらし吹そふ秋もきにけり

● ひこほしのまれにあふよの〔と〕こ夏はうちはらふとも露けかりけり 後撰

はかなきそらにそさすらふらん

● さすらふたよふ也 ● 伶傳也 サス ラフ

あはれたへさりしもやくなきかた思なりけり 〔片〕

● いせのあまのあさなゆふなにかつくてふあはひのかひのかた思にて

ひとやりならぬ 人つてならぬ也

古今

● 人やりのみちならなくに大方はいきうしといひていさかへりなん

源實左近少將

むねこかるゝゆふへもあらんとおほえ侍る

● 三教指歸云 寧莫術婆伽之焼胸

● 術婆伽は魚をうる人なり帝王のひめ君宮を見たてま」(二八ウ)

つりていかにしてえてしかなと思へりもつところの魚を

たてまつりてあたひをとらすしてかへらんとするに皇女あ

たひをすつる心をたつね給に身をなけ命をすてゝあふにか

へんと思ふゆへにあたひをとらすといふ皇女心さしの切なる

事をあはれみてこの月の十五日に社にまうつへき事あり

その時かならすあひまつへしとの給に術婆伽まつまうてゝ

皇女をまちたてまつるに當社の明神この事をかゝみて

方便を「な」さくわかたんなの君をしていやしきしつかやつこに

とつかしめむ事心のまゝならばあに神非礼をうくるに

あらすやたゝ婆伽をしてねふらしめんとおほす皇女す

てにまうて給に婆伽社頭にいなたりおこさしむるにあへ

てをとろかす皇女御衣の瓔珞をときて婆伽か衣〔に〕」(二九オ)

かけてかへり給ぬ術婆伽驚てこのやうらくを見るに心の

をく所をしらす則むねのうちに姪慾のほのほあらはれ

て身つからこかれていのちをうしなへり忒中に不相應

のふるまひあ〔る〕物〔を〕はかゝなといふはこの例ならんかし

● 未曾飲〔炭〕タテ アラスミヲ腹□ツキコト 熨シ 如レ 燒カ 不レ 憶ト 吞ツ 刃□□ヲ 腹ノ 穿ウクルコト 似タリサクニ 割ニ 遊遊仙窟文

すきたるつみけにをもかるへし

● 過たる罪也

よき方〔の〕〔か〕きりとりくしすつへきくさわいませぬ人はいつ

くにかあらむ

● 種也クサワイ

きち吉祥上天女を思かけむとすればほ〔う〕けつきくすしからん

こそわひしかりぬへけれ

● 金光明最勝王經大吉祥天女增長財物品第十七云「(二九ウ)

欲請大吉祥天女當洗浴身着淨衣塗名香入淨室稱

諸佛□薩名号神咒現其室中云



さゝえのきは ● 才 ● 伎 なま／＼のはかせ ● なましろの師也

かくもむ ● 學問也

□かふたつのみちうたふをきけとなんきこえこち侍し

● 聴我哥兩道富家女易嫁輕早□其夫貧家女難

嫁※1〔晚〕孝於姑聞□欲娶婦娶婦意如何文集秦中吟

その女をしとして ● 師也 そのおん ● 恩也

けなつ人家かしきさいしとうちとけむにむさいの人かたわなるさまみ

えんにはつかしくなんおほえ侍し

● 妻子也 ● 無才也

月ころふひやうをもきにたえかねてこくねちのさうやくを（三六才）

服（朱）ふくして

● 風病 ● 草藥蒜也 延延式云 八十種草藥 廿四種草藥之中 蒜是極熱草藥也（「コクネツノサウヤク」と右朱傍記す）

さるへからんさうしはうけ給はらむ

● 雜事也

さ□かにのふるまひしるきたくれにひるますくせといふかあやなさ

● 我せこ□くへきよひなりさ／＼かにのくものふるまひ□ねてしるしも 衣通姫

あはめにくむ ・ 淡惡 あはくしくにくむ也

□へ「て」おとも女もわるもの「は」わ「か」虚俗キヨシヨクワロモノ遊仙窟(朱)わつかにしれる方の事をのこり

なく見「せ」つく□んと思へるこそいとをしけれ

● 論語云 知者言未必尽也 ● 老子經云大弁如訥 トッ  
コト、モリ

三史 五經

● 史記 漢書 ● 後漢書 ● 毛詩 ● 禮記 ● 左傳 ● 周易 ● 尚書 (三六ウ)

さるへきせちる 五月五日節

● 楚屈原維王につかへて三閭大夫たりし時に同列大夫

キムシヤウ 靳尚といふ人屈原が才智の勝たるをそねみて王に讒し

申ければとかなき屈原をはなたれにけり屈原江濱にあそひ

〔き〕吟澤畔に漁父あり屈原を見ていはく公は楚三閭

大夫□□あらずや屈原云舌皆濁れり我ひとりすめり衆

人皆醉我獨醒り此故に王にはなたれたり漁夫云世皆濁

はなそ浪をあけさる衆人皆醉らは何そ糟をすゝらさる

屈原かいはく沐する物「は」冠「を」はらふ浴する物は衣をふるう

漁夫「云」滄浪のみつすめらは我纓をすゝくへし滄浪の水

濁らは我足を洗へし屈原我魚腹にいりて世をさるに〔は〕

しかしとて江底にしつむ屈原か妻江頭にゆきて忌日〔三七オ〕

ことにさま／＼のひほろきをそなふ夢のうちに屈原つけ

ていはく淵のなかに龍あつまりて我食をうはふ汝飯を

茅の葉につゝみて五色のいにてまかして龍のかたち

につくりて五月五日をむかふることに淵になけよ龍おそれ

てさりなん我はしりてうけなん〔と〕〔い〕へり妻ゆめのことくして

〔江〕底になくいまのちまき是也ちのはにつゝむ心さし是

より〔あ〕らはれたり

注蒙求云（朱）

九□九日の宴にまつかたき詩の心を思めぐらし

月令曰重陽の日白菊に黄花あり周易云天数九秋数

九相應□曰重陽（誤字）淮南の桓景に費長房つけていはく

此秋九月九日に家にわさわひきたるへしすみやかに家を

さりて家人をしてきぬの袋に茱萸をいれてひちにかけ〔三七ウ〕

させてたかき所にのほりて菊花をのみ菊をかさしてゐ給へと

いひければをしへのまゝに高山にのほりてかへりて見るに家の

うちに・猪・鶏・牛・羊一時にしにけりと云々 注蒙求云

はてくはあやしきろともになりて けうそく

● 論ともなり ● 脇足也

かの人くすてかたくとりいてしまめ人 テンキノマメヒト 展季 ● 又真人

あなかま あなかまこんともやみそかなれ 風俗鳴高 又名大宮

こよひなかみ内よりはこなたはふたかり侍りけりと人くきこゆ

● 天一神也 杏俗所稱 奈加神 中神也

● 金櫃經云天一立中央爲十二將定吉凶断事者也 如此文中字 無不審歟

件方忌事古今所遠來也 安家説

● 又永久四年十二月二日縫殿頭賀茂家榮依法性寺殿仰」(三〇才)

令注進云天一方俗謂之長神

● 己酉日在艮六ケ日・乙卯日在卯五ケ日・庚寅日在巽六ケ日・丙寅日在午五ケ日

● 辛未日在坤六ケ日・丁丑日在酉五ケ日・壬午日在乾六ケ日・戊子日在子五ケ日

自癸巳日至于戌刀日并十六ケ日在天上

● 經日数之方遠事

● 又九条殿御記云天慶七年正月七日太政大臣從十二月廿八日至昨日

合八ヶ日閉門物忌仍巳時參殿

天慶六年十二月小廿八日壬午同七年  
正月〔六〕日己卯 賀家説

なか河のわたりなる家なんこのころ水せきいれてすゝしきかけに侍ときこゆ

● 中河

今京極河也  
見李王記

古人稱中河法成寺之始人稱中河御堂之由

在行成卿記

● 榮花物語云中河邊御堂をたてらる

法成寺  
東北院也

● 今案賀茂河謂東河桂河爲西河京極河謂中河歟〔三〇ウ〕

しそきて なめけなる きよろしき おまし所 寢殿也

● 退也

● 滑也

無禮儀也

● 清宜也

● 茲也

御ましむしろ也

あるしもさかなもとむとこゆるきのいそきありく

● たまたれのこかめを中にすゑてあるしいもとやさかなもと

めにこゆるきのいそにわかめかりあけに 風俗哥

件儀在相模國

きぬのおとなひ

● 夏衣すゝしにねりひとへを□〔さ〕ぬ故有音

かみ心なし〔と〕むつかりて ● 守也 さうしのかみより ● 障子上也

よすかさたまり給へる ● 便也

さゝやか ● 少々 ● 狭々也 さるへきくまには ● 隈也

くつろきかましく哥すしかちにもあるかな ・あはらなる也

かみいてきてとうろかけそへ ・燈爐 (三一オ)

とほりちやうもいかにそはさるかたの心もなくてはめさましき

あるしならむとの給へはなによけむともえうけ給はらすと

□しこまりてけ

・和加伊戸波止波利帳於毛多礼留乎於支美支万世无

己余杏□〔美〕

以左可奈余なによけむあわひさたうか世与介无安波比

左太字か加世与介无 催馬楽 呂

このあね君やまうとのうちのおや ふいにかくて物し侍也

・真人也 朝臣といふたくひ也 ・不意 心ならずといふ歟

ありつるこのこゑにてものけ給はる

・ものゝけしきうけ給はる也

ねたう心とゝめてとひきけかしとあいなうおほえ給 (三一ウ)

・としふれとわすられはてぬ人の上は心とめてそ猶きかれける

まろははしにね侍らむ ・丸也 しもになんゆにおりて ・湯也

在伊世集

たゝいまゝうのほり侍つといふ ●昇進也

さゝやかにてふしたり

●少々 ●狭々 ちひさくほそき也 ●細々許 セイノキヨトサ、ヤカナリ

遊仙窟

とうもなくしておくなるおましにいり給ひぬ

●無動也 うごく事もなしといへり

□つくよりとうて給ことのはにか ●取出也

おほしくたしける 思下也 かくをしたち給 ●押立也

人からのたをやきたるにつよき心をしめてくはへた「れ」はなよ

たけの心ちしてさすかにおるへくもあらず

●なよ竹のよなかきうへにはつ霜のおきゐて物を思ふころかな 古今 藤原 忠房 (三三二オ)

なよ竹はにかたけ也 すへておれかたき性ある竹也

ありしなからの身にてかゝる御心はえを見ましかは

●とりかへすものにもかなや中をありしなからの我身と思はん

又見なをし給のちせもやと思給へなくさめましを

●若狭なるのちせの山のゝちに又あはんかならす今日ならすとも

よしいまは見きとなかけそとて

●それをたに思事とて我やとを見きとなかけそ人のきかくに  
鳥□しはくなくに心あはたしくて

●数鳴也 ●周章也

ひきたてゝわかれ給程心ほそくへたつる□きのとみえたり

●あふさかの名をはたのみてこしかともへたつる關のつらくも有哉

あて人 ●あてやかなる人なり」(三三ウ)

〔ぬ〕□夜なければなとめもをよはぬ御かきさまなれと見もいれ

られす

●戀しきを何につけてかなくさめん夢たにみえすぬるよなければ

ふつゝかなるうしろみまうけて ●ふとしといふ也

〔や〕□水のめほく ●面目也 人くさけす ●不遠也

むしんに心つきなくてやみなん ●無心也

□ようなるよしをきこゆ ●不用也

〔敷〕〔な〕らぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらすきゆるはゝきゝ

●その原やふせやにおふるはゝきゝの有とは見れとあはぬ君かな 源重之

●信濃國にそのはらやふせやといふ所に有也はゝきゝに有兩説



一説ニハはゞきゝのもりあり其森いとしけくそのもりの中  
にはゞきゝ木(朱)おひたりそれをとほくしてみればありもりの「(三三オ)  
したにいきてみれば木のしけりて見えぬによりていふ也  
一説ニハはゞきゝににたる木のあるをちかくてみればうす  
る也とこのきしかるへからすたゝとをくは「は」ゝきゝ  
の有と見てちかくてみればまかふよしをそ用へき古説「(三三ウ)

● 光源氏物語空蟬□□セシ 箒木並一

● 問云並の烏先例ありや

● 答云うつほのとしかけといふ物語あり源順作云々

五のならひまつりのつかひ

五のならひきくのえん 是ハ其例也

ゆうやみのみちたとくしきまきれに我車してゐてたてまつる

● 夕やみ□みちたとくし「月」まち「て」かへれわかせこそそのまにもみむ万□  
くれなるのこしひきゆへる程はうそくなるもてなし也  
豊前國姫子

●袴賢也

●傍側也

〔そ〕ろゝかなる人のかしらつき

●尖也

さかりは

●下場

けち ● 闕 さうとけは ● 早速 いそかはしき也

むへこそおやのになくは思らめ ● 宜 ● 承諾 ● 無二 (三四オ)

そこはちにこそあらめ ● 持也 このわたりのこう ● 劫

とを<sup>十</sup>はた<sup>卅</sup>みそ<sup>三十</sup>よそ<sup>四十</sup>なとかそふるさまいよのゆけたもたとく

しかるまじう見ゆ

● 伊よのゆのゆけたはいくついさしらすかそへすよます君そ知らん

雜藝

● ゆけたの事

● 伊与國あをしまの渡に潮のなかひななみちちにみゆるなり

ゆの□いるけたのかたちななみ七十七たんなりけたの数

五百三十九歟斗藪のついでに彼所にゆきて里の人に

たつねしかはとしたけたる海人のいさ給へかしこへとてさそひ

まかりて見せたりしこそうれしかりしか

そほれるたり われにかいまみせさせよとの給

● たはふれたる也 ● 視其私屏

たはふれ也

視其私屏

日本記第二

「三四ウ」

人／＼あかるゝけはひなり ● 頓(朱)也

かせふきとほせとてふす

● 風吹と人にはいひてとはさゝしあけむと君にいひてし物を  
とけたるいもねられすなん 六帖云

● 「君」戀る涙のこほる冬のよは心とけたるいやはねらるゝ  
「は」「る」ならぬこのめもいとなくなけかしきに

● 櫻花□ほふ物から露けきは「こ」のめも物を思ふなるへし 拾遺  
このめはる春の山田をうちかへし思やみにし人そ戀しき

● いとなく いとまなく也

人かうつれるを身ちかうならしつゝ見る給へり ● 人香也  
いかにいせをのあまのしほなれてやなと思ふもたゝならず

● すゝ香山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみる覽(三五才)  
又しる人もなき事なれば人しれすうちなかめてゐたり

● 枕より又しる人もなき戀を涙せきあえすもらしつる哉 古今  
貞文  
こ君わたりありくにつけてもむねうちふたかれと御せうそこ

もなし

● 山かつの垣ほにはへるあをつゝら人はくれともことつてもなし  
〔あ〕りしなからの我身ならはとゝりかへす物ならねとしのひ  
籠コ 古今コノイマ

かたければ

● □りかへす物にもかなやよの中を有しなからの我身と思はん  
空〔蟬〕の身をかへてけるこのもとに猶人からのなつかしきかな

● うちはへてねをなきくらすうつ蟬のむなしき戀もわれはする哉

● 打磬蟬といふ文ありけいをうつやうになくゆへにいきたる  
をもうつせみとよむ也うちきゝ同けれとも心ことなり」(三五ウ)

● 光源氏物語夕顔ユフカホ 帚木並二

六条わたりの御しのひありきのころ

● 六條御息所秋好中宮御母  
前坊御息所也 六条院于時  
中將 ● 大鏡云

前坊中將御息所のちに重明親王北方になり給齋宮

女御の母儀也

いつこを〔さ〕してとおもほしなせはたまのうてなもおなしこと也  
〔如〕

● 古中はいつこかさして我ならんゆきとまるをそやとゝさたむる  
古今コノイマ

きりかけたつ「も」の ・菅三品公良かはきりかけた「つ」物といふ事しれる人なしと  
なん申されけるとそ

をちかた人に物申すとくちすさひて

・うちわたすをち方人にも申すわれそのそこに白くさけるは

なにのはなそも 古今

このもかのも 此面(朱)彼面(朱)乃 □あやしくうちよろほひてむねくしからぬ」(四〇オ)

のきをつまことに

・つくはねのこのもかのもに景はあれと君かみかけにますかけそなき 古今

「さ」すかに「さ」れたるやりとくち

・されたるはたはふれたる詞也 俊頼口傳云 誹諧哥「は」されたはふれ サレ「ウ」タ  
ハイカイ

たるか「こ」としといへり

しろき扇のいたうこかしたるを

・人ことにかう色なる扇と思へり香 薰物也 にたきしめ

たるかこかれたる心ちのするといへるなるへし

かきををきまとはし侍て いむ事のしるしにかうよみかへりて

・鑑也 戒也

たゝかくおまへにさふらひ御覽せらるゝ事の「か」□り侍なん

事をくちをしくおもふ給へたゆたひしかと」(四〇ウ)

● いてわれを人なとかめそおほ舟のゆたのたゆたにも思ふころそ  
こゝのしなのかみにも かたほなるをたに※

● 九品の上品上生也 ● 頑也 ● 凡也

いはけなかりける ひとゝなりてのちは

● 幼なり

● 長成 ヒト、ナル ● 爲性 ヒト、ナル

さらぬわかればなくもかなとのみなんなとこまやかにの給

● 舌中にさらぬわかれのなくもかなち「よ」といひる人のこのため 伊「せ」語  
てもあてはかにゆへつきたり

● あてやかにほかなけにゆへあるさまにかきたるといへる也

心あてにそれかとそ見る白露の光そへたる夕顔のはな

● 心あてにお「ら」はやおらむはつ霜のをきまとはせる白菊の花 古今躬恒

やうめいのすけなる物のいゑ□なん侍りける」(四一オ)

● 揚名介事依有子細不述注有別昏

はらから しも人のえしり侍らぬにや

● 一腹の兄弟姉妹也 ● 下人なり

よりてこそよれかとも見めたそかれにほのくみつる花のゆふ□〔ほ〕

●此哥おりてこそといふ本ありそれこそよけれ花をお〔る〕に

もかよひ車よりおりたる心ち〔も〕かよひてと申人侍れとも

ほのく見つるとはてたるにちかつきよりてこそといふは

きよよかるへくや

しひらたつ物

心あはたしくて

褶

シヒラ  
ウハモ

●内藏式云 駕輿丁褶

●周章

アハタ、シ

すきかてにやすらひ給へる御さまたくひなし

●難過也〔四一ウ〕

はなのかけには猶やすらはまほしきにや

●古今序云大友黒主はそのさまいやしいはたき木おへる

山人の花の景にやすめるか□としとたとへたる風情にや

かみのさかりはめさましようみ給

あなかまとてかく

●下場

●手搔

はしよ〔り〕もおちぬへけれはいてこのかつらきの神こそ心さかしう

しをきたれとむつかる

● 岩橋のよるの契もたえぬへしあく□わひしきかつら木の神

● 昔役優婆塞といひける人かつらきにいます一言主ひとことぬしと申

神に葛木と吉野山の峯とにいは橋を渡し給へと

申□るゝに神のかほはせ見にくゝおはするによりて夜にま

きれて渡し給ひけるかあけ方なりにければかたちを」(三八オ)

はちてわたしさし給へる也

まめ人のみたるゝおりもあるを

● 展テンキノマメヒト季 文選 ● 又真人

● まめなれとあたなはたちぬたはれしまよる白波をぬれきぬ□「し」て

□□ときて ● 穩オホトカナリ

□□しありけんものゝへんけめきて

● 大和國おにをとこ女あひすみてとし比になりにつれとこの男よる

はとまりてひるは見る事なかりければ女いまたそのかたちをみ

る事なしとうらみければ男あはれかりて汝我かたちを見ては

おそるゝ心あるへしといひければ女のいふやうたとひかたちみにく

しといふともあひみん事をねかふといひければさらはみくしけ

後撰  
大江朝綱朝□



の中にをらんねかはく「は」おのれひとりひらきみよといひてかへ」(三八ウ)

りぬさてくしけをあけてみればくちなはわたかまりてありお

とろきてふたをおほひてさりぬそのゆふへ男きたりていふや

うわれを見て驚思へる事まことにことほりなりわれも又きた

らん事はちなぎにあらすやといひてなくくわかぬ女さ

すかにおほつかなくや思けんをまきあつめたるをへそといふ

そのへそのをにはりをつけてかりきぬのすそにさして

けり夜あけてそのをしるへにてたつね行てみれば三輪の明神

のほこ「ら」のうちにいれりそののをこりみわけのこりたりけれ

は三輪の山とはいふなり

●戀しくはとふらひきませちはやふ「る」みわの山もとすきたてる門カト (朱) 三輪明神哥也

「い」つれかきつねならんたははかられ給へかしの給

●假色迷人猶若是眞色迷人應過此彼眞此假俱迷人心※1 (三九オ)

害 惡假貴重眞狐假女妖容猶淺一朝一夕迷人眼女爲狐媚

容則深日長月長溺人心文集

「こ」としこそなりはひにもたのむ所すくなく ●稔ナリハヒ ●農ナリハヒ

こほくとなる神よりもおとろくしくふみとろかすからうすの  
をとままくらかみとおほゆ

● 碓タイカラウス ● 枕上

しろたへの衣うつきぬたのをと

● 八月九日正長夜 千聲万聲無止時

かへのなかのきりくす

● 壁葦家と音始乱 藜芽處と藥初開 菅家万葉集

● 禮記月令云 季夏蟋蟀居壁

おきなひたるこゑにぬかつく「そ」きこゆる」(三九ウ)

● 額突スカツク 稽首也

あしたの露にことならぬよに何事むさほる身のいのりにかあら  
んときゝ給

● 居累卵之危而圖太山之安爲朝露之行而思傳舌之

功 朝露言易盡也蘇子曰人生一世若  
朝露之託於桐葉耳與幾何 豈不惑哉豈不惑哉 後漢書  
〔列傳第〕冊九※

● 朝露貪名利 夕陽愛子孫 秦  
文集秦中吟

みたけさうしなるへしなもたらうらい□うしとそおかむなる

● 當來道師 弥勒慈尊

● このよは尺尊のみよ也五十六億七千万歳のよち弥勒佛の  
舌にいておはしまして舌をしろしめすへきゆへに當來導

師と〔は〕申也

長生殿のふるきためしはゆ〔よ〕しくてはねをかはさんとはひきかへ〔四二オ〕  
てみろくのよをかね給ゆくさきのたのめいとこちたし

● 七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥 長恨哥

いさよふ月にゆくりなくあくかれん事を女もさすかに思やすらふ

● 山のはにいさよふ月をいてんかと待つよをるによはふけに〔り〕

● いさよふ月は十六日のよの月のまた出やらぬをいふ也

そのわたりちかきなにかしの院に□〔は〕しつきてあつかりめしいつ

● 問某院何所哉

● 答某院若河原院歟 六條坊門万里小路也 昔寛平法皇本院の

おとよ〇の御女京極御息所とひとつ御車にて月のおもしろ

かりける夜河原院に御ゆきなりてかうらむのほこ木に御

車のなかえをうちかけておりさせ給てもろともに月をな

かめておはしける程にうちよりものゝけはひ「し」「て」御息所を「(四二ウ)  
とりて引いたてまつる「に」法皇おとろきていたきとゝめ給て  
なにもものなれはかくはとゝひ給に融丸かひそかし□てうちすて  
たてまつりたりけれと御いのちはたえにけり融の大臣彼院に  
執心ふかくして亡魂とゝまりて望郷鬼となりけるにやこれ  
らを思に河原院をそらおほめきになにかしの院とい  
ふにやとそおほゆる

けいめいして

□のゝしもけいし

● 經營して也

● 嫫嫫ケイメイ 遊仙窟文

● 殿の下家司也

おきな<sup>か</sup>はと契り給よりほかの事なし

● にほ鳥のおきな<sup>か</sup>はゝたえぬとも君にかたらふことつきめやは万  
こた<sup>木立</sup>ちいとうとましくものふりたりけちかき前裁などは見所

なくみな秋のゝらにて水<sup>いけ</sup>もみく<sup>ヒ</sup>きさ<sup>ヒ</sup>にうつもれたれはおそろし

け也「(四三オ)

● 里はあれて人はふりにしやとなれや庭も籬も秋のゝらなる  
へち<sup>別納</sup>なうの方にそ曹司なとして人すむへかめれとこなたははな

古今  
僧正遍照

れたり

● 院司 廳召次所 仕所 別納所 御服所 進物所 所衆 武者所 御隨身所 かやう□をかれたるところの一所に別納とてある也

あまのこなれ〔は〕とて

● 白浪のよするなきさに世をつくすあまのこなれはやともさためす

□れ□らなゝりとて

● あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をはうら□し 古今典侍藤原直子朝臣

つと御かたはらにそひふして やまひこのこたふるこゑ

● 集 ツト 日本記 ● 山孫 ヤマヒコ

われかのけしき也

● 夢にたになにかも見えずみゆれともわれかもまと□戀の〔し〕けきに 万 (四三ウ)

うへわらは ひ〔あ〕やうしとなんといふ

● 上童 侍童也 ● 秦始皇本紀云 誰何火行 ヒアヤ〔ウ〕シ

〔内〕をおほしやりて〔な〕たいめんはすきぬらんたきくちのとのる申は

いまこそはとおほすは〔い〕たくもふけぬにこそ

● 亥一尅侍臣名對面 起延延元年 奏歟(朱) 同亥侍臣秦之後瀧口武士名

對面延延九年五月廿日藏人源揚宣旨云候瀧口輩三ヶ夜

以上無故不參莫預着到宜待〔後〕仰者

むかし物語のた〔と〕へにこそかゝる事はきけいとむくつけうもあるかなどめつらかなり

● 伊勢物語云おにはやひとくちにくひてけりあなやとい

ひけれと神なるさはきにえ〔き〕かさりけり

南殿の鬼のなにかしのおとゝおひやかしけんためしおほしいてゝ〔四四オ〕

● 貞信公於南殿御後被取劔石付給拔劔給之由在大鏡無

他所見歟

けしきある鳥のからこゑにきこえたるもおそろしき山になくらん

ふくろうはこれなりけり

● 梟〔鳴〕松桂枝狐蔵蘭菊叢蒼苔黄葉地日暮多旋

風  
文集第一凶宅詩

夜のあくるひさしくちとせをすくす心ちし給

● くるゝまはちとせをすくす心ちしてまつはまことに久しかりけり

君もえたえ給はす

● 一眉猶巨耐 雙眼定傷人  
ノタモ エタウマ□キニ ヘルハ テソコナウラム 遊仙窟

すきやうなとをこそすなれ ● 誦經

みつわくみて侍なり 〔媿〕組也 支離也〔四四ウ〕

● 年ふれは我黒髪も白河のみつわくむまでなりにけるかな 後撰 檜垣姫

● としたけぬれは贅かゝまりせくゝまりて二の□□とかりいて

たる中にかしらましはりぬれは三の輪をくみいれたるかこ

としこれにより□〔み〕つわく〔む〕とはいふ也

うはむしろ しわふきやみ 嗽病

● 上苑也 〔兒〕近來患癩聲不徹 遊仙窟

らうそう か〔こ〕と こたう

● 老〔僧〕 ● かこつ也 ● 小堂

ほうし二三人はかり物かたりう□しつゝわさと□ゑたてぬ念佛を

そする

● 万歳身後抄云喪家佛事次第

● 葬送以前無音念佛以歸立之尅限日仏事勤□□〔四五才〕

● 佛經供養事 歸立之時葬送以前之日數 雖何ヶ日分今夜可勤累也

ときやう ● 讀經也

つゝみの程にて馬よりすへりおりていみしく御心ちまとひければ惟  
光心あはたゞしくて河の水□□をあらひて清水の観音を念

したて□つる

●千手經云

●十三者不爲邪神惡〔鬼〕得便死十五者不爲非分自害死誦

持大悲神咒者不被如是十五種惡死

●清水寺觀音御哥

●猶たのめしめちかはらのさしも草われよのなかにあらむかきりは

●清水寺者桓武天皇御宇延曆十七年建立之本願主行影居士

●檀那田持丸將軍村戴額ハ道風書之（四五ウ）

かの右近をめしてつほねなとけちかくたまはせてさふらはせ給ふく

いとくろくしてかたちなと□□らねと見くるしからぬわか人也

ふくらかにくろき人なり

或人來りていふやう阿佛御房は光源氏物語に親行かひか

事をのみよむときくこそあさましけれとおほせらるゝ也と

いふに驚てかの亭にまうてゝ尋申にこと事はしらす夕



顔上の女房右近かしうにをくれて黒服きたるをは服とこそ

いかな〔る〕〔人〕もよむをふくらかによみなさるゝときくをこそ

異様なりとは申せと申さるゝにさては御ひか事にては

也おほしめしなをさるへく候そのゆへは五條三位殿俊成卿(朱)故光行

申あは〔せ〕て句をきり聲をさしてはき京極中納言殿定家卿(朱)〔も〕冷

泉前大納言殿爲家(朱)もよも難せさせ給候はしまして御難いかゝ(四六才)

あるへく候覽黒服の人五旬かうちに出仕はゝかりあ〔り〕い

はんや初參の人黒服しかるへからすとて筆□をさへられし

時ふるき物かたりにも見ゆ又清少納言か枕草子にも申し

たるむねありとてふく□□にしていろくろき人と思て清

て聲シヨウ(朱)□〔さ〕ゝれ候ぬれは其後□すみてのみよみつけてはに

こそと申にいさゝらはやすゝとつめ申さんくろこえなる

人のみこそあるにな〔と〕六十帖かうちに又ほかにはいはぬそと

申さるゝ時この物語にはたゝひと事ことは申たる事のみこ〔そ〕

はへあのしはふるい人と申ては御説ヒには老者也しわ

ありてふるい人にてこそあれこのはふるいたる人にはあら

すと仰られ候なれとも五十四帖かうちにたゝ兩所候にいつれ

も老人のかたちとは「見」えすいやしき山かつめかしき物とこそ」(四六ウ)

見えて候へ又揚名「介」も夕顔のあるしよりほ□は見えす

ハ又をしかいもとある□と申たるもとめの烏はかり

にこそ候へまれなることはをつくして人のさとりをひ

らかしめんかためにかきをきたるかともおほえ候但もたせ

給へる御本は故三位殿俊成卿(朱)の御本にてはハはすそのゆへは大

えきのふようひやうの柳と書て未央の柳一句をは見せ

けちにとゝめられて候ニこれは「二」句なからならへてかゝれて候

このひか事によらはいつくもあやまりのみそハらむと答

申たりしかはさらはそれにはさこそ心えられめとはかりにて

申さるゝむねも侍らさりきさりなからこととはりとはおもは

れたりしにこそ

いへはとゝいふとりのふつゝかなるこゑになくをきゝ給も」(四七オ)

● 鴿 和名以間波土 頸短灰色也

十九になんなり給 ● 夕顔上 十九歳 ● 玉鬘君 三〇

いとしも人にとくやしくなん

● 思ふとていとしも人にむつれけんしかならひて「は」みねは戀しき女は心やは□か「に」てとりはつして人□あさむかれぬへきかさすかにものつゝみし見む人の心にしたかへら「ん」なんあはれに我心のまゝにとりなをしつゝみんもなつかしくおほゆへき

● 五行大義云 以男爲對以女爲柔女平隄之礼

ますたはまことになときこえたりめつらしきにこれもあはれわすられ給はすいけるかひなしやたかいはまし事にか

● ねぬなはのくるしかる覽君□りもわれそますたのいけるかひなき

猶こりすまに又もあたなはたちぬへき御心のくさはいなり」(四七ウ)

● こりすまに又もなきなはたちぬへし人にくからぬよに「し」すまへは

ひえのほけたう御ふみの師にてむつましくおほすもむさうはかせ

● 法華堂

● 文章博士

光源氏君御文師也

ほうしゝ給 ● 法事也

伊与介は神無月のついたちころにそくたりける女房空蟬(朱)のくたらんに

とてたむけ心ことにせさせ給

褐 タムケ 饑別送物也

● 又云醜 是祭礼具也

ぬさなといとわさとかましくてかのこ「う」ちきもつかはす

● 幣也 ス ● 又麻也 ● 醜〔同〕事也

● この旅はぬさもとりあへすたむけ山もみしのにしき神の□にく  
おかしきさまなるくしあふき 古今 菅原朝臣

● 帥 隆家 研子(朱) 下向之時中宮よりはなむけに扇をつ□はしける

● すゝしさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ (四八オ)

こうちきは夏のにてまた衣かへのもたひのきぬ一にてそ有け〔る〕

● たむけの衣冬ながら夏の衣を給はりて〔き〕□れはたひ〔衣〕は  
いろもかはらすといへるなるへし

すきにしもけふわかるゝもふたみちに行方しらぬ秋のくれかな

● 夕顔のわかれと空蟬の城外〔と〕兩様を思てよめるなるへし (四八ウ)

● 光源氏物語局第三 若紫 ワカムラサキ

わらはやみにわつらひ給

● 痼病 ● 灸瘡<sup>※</sup> ● 俗云發心地

北山なるなにかしてらといふ所になんいとかしこきをこなひ人侍る  
めしにつかはしたるに老かゝまりてむろのにもえ出侍らぬよし  
申させたれば

● 圓融院後院御時瘡疾之時山座主慈惠僧正をめす老

病無術「よ」しを奏して不參再三の後めしに隨てまいるかち

したてまつりてすなはち御滅あるよし舊記にみ□た「り」

京の花さかりはすきにたるを山のさくらはまたさかりにて<sup>ト※</sup>

● ふるさとの花はちりつゝみ吉のゝ山のさくらはまたさかりなり

● さとはみなちりはてにしを足引の山のさくらはまたさかりなり

けむ方のをこなひもすてわすれきて給<sup>侍を(朱)</sup>

● 驗者方也 ● 捐也

さるへきふんつくりてすかせたてまつる ● 符也

かちなとまいりて ● 加持したてまつるなり

たゝこのつゝらおりのしもに 九折 盤折

● 山下望山上初疑不可舉誰知中有路盤折通巖巔

文集  
悟真寺詩

赤人

射恒

「(四九才)

● さゝ波や志賀の山ちのつゝらおをりくる人たえてかれやしぬらん 六帖第六

● もし此哥によらは志賀寺ともやいふへからんなにかしてらおほつかなし

● 問云なにかしてらいつくの寺とか心うへき

● 答云北山なる所にとつゝらおりと侍は鞍馬寺などにや

と見る程に志賀の山ちのつゝらおりと侍古哥によらはし

かてらにや侍らんしりへの山にて京のかたみたと侍も」(四九ウ)

—— コノ間約二丁落丁ス ——

● はるなれはすかるなるのゝ郭公ほとくゝいもにあはすきにけり 万

こしむなとまいらせ給 たらによむもたうとし

● 護身 陀羅尼

うとむ花のはな待えたる心ちしてみ山さくらにめこそうつらね

● 俱舍論云輪王八万上金銀銅鐵輪一二三四州逆次獨如佛

● 私云金輪王領四州銀輪王三州銅輪王二州鐵輪王一州也輪王

行幸之時金銀各輪寶各隨果報先立而摧破山谷成平地令

成行幸故(云)輪王人壽八万歳上時金輪王遶四州尔時海水半

減此時優曇華出現此花輪王出世先兆也

●法華經云無量無數劫聞是法多難能聽是法者此人多復難

譬如優曇華 云々

●天台云三千年一現、即金輪王出 云々 又云此靈瑞華似蓮 (五〇オ)

華故□ ●疑云法花無量劫難聞譬如優曇者有所以若三

千年此花現〔者〕何爲奇瑞乎 ●答云一義云此花開時〔分〕〔三〕千

年云歟每三千年非云出現

●哥の心は光源氏君をみれば金輪王出〔現〕の心ちすしかれば是を

優曇花と見るゆへに山のさくらにはめもうつらすとよめる也

おく山の松のとほそをまれにあけて〔ま〕□みぬはなのかほを〔見〕るかな

●夕霧□むろのとほそ〔も〕たちこめているへきみちも見えすあるかな

ひしり御まもりにととこたてまつる

●獨鈷 とこ

僧都さうとく太子のくたらよりえ給へりける金對樹のすゝのたま 百濟國(朱)

のさうそくしたるやかてかのくによりいれたりけるはこのからめきたるな

からすきたる〔袋〕にいれて五〔え〕うの枝につけてこむるりのつほに御く (五〇ウ)

すりともいれてふちさくらなどにつけて所につけたる御をくり物とも也

● 覺忍

山北山僧都と榮〔花〕二見えた□

● 金對樹珠數

不見太子傳如何

とよらのてらのにしなるやとうたふ

● かつらぎのてらのまへなるや とよらのてらのにしなるや

えのはるにしらたましくや ましらたましくや

催馬樂

僧都琴を身つからもてまいりてこれたゝ御てひとつあそはしておなしう

はやまのとりもおとろかし侍らんとせちに申給

● 琴

五絃也 加文武之緒者

● 文武天皇彈琴天人降來五反袖をひるかへす

● 琵琶鼓琴鳥舞魚躍

列子文

とはぬはつらき物にや□らん〔と〕しりめに見をこせ給

● 君を□□て思はん人にわすらせてとはぬはつらきものとしらせん〔五一オ〕

いのちたにとてよるのおましにいり給ぬ

● 命たに心にかなふ物ならはなにかは人をうらみしもせ□

いかてかのひとそうにおほえ給覽 ● 一孫也

よのまのかせもうしろめたくなとあり

● あさまた〔き〕□てゝそみつる梅のはなよのまのかせのうしろめたさに

拾遺 兵卜卿元良親王



ゆくての御事

ふり□へ

● すきかての御事也 ● うちはへなり

これはまたなにはつをたにつけ侍らさめれはかひなくなん

● 難波津にさくやこの花冬こもりいまは春へとさくやこのはな

● 古今序云王仁といふ人よめる也此哥をそおさなき人ので「な」

らひのはしめにもしけるとあ□木コ(朱)の花とは梅花をいふなるへし

たゝそのはなち□きなんみ給へまほしき「と」て「(五一ウ)」

● 放書 もしひろひともいふ 放字ハ學也 「な」らひかきと心うへきにこそ

● 西圓法師□花近き蘭と心うるよし申侍しかと物語の心には

たかひ侍にや

あさか山あさくも人を思はぬになと山の井のかけはなるらん

● あさ香山かけさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

くみそ□てくやしときゝし山のゐのあさきなからやかかけをみすへき

● くやしくそ□みそめてけるあさければ袖のみぬるゝ山ズ(朱)の井の水

王命婦 王は姓也

くらふの山にやとりもとらまほしくおほえ給

● すみそめてくらふの山の(朱)にいる人はたとくそかへるへらなる 拾遺

この月ころは□「り」しにまさる御物思にことくおほされてすきゆ□

● いとひてはたれかわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも 伊世語「(五二才)」

おなし人□やとことさらにおさなくかきなし給へるしもいみしう

おかしけな「り」

● ほり江こくたなくしおふねこきかへりおなし人をや戀ん□思□し

たまはせたるはけふもすくしかたけにて

● 少納言乳母か詞也御事つて給はせたる人はけふもすくし

かたけにあやうければわたくし□御返事は申といふよし也

「な」けの「御」□とのは ● な「を」さりのことの葉也

あしわかうらの浦にみるめはかたくともこはたちなからかへるなみか□

● あしわかうらのうらふきよする白浪のしらしな君はわれ思ふとも

なそこひさらんとうちすし給へるを

● 人しれす身はいそけとも年をへてなそこえさらん相坂山(朱)の關古今

たちとまり霧のまかきのすきうくは草のとさしにさはりしもせし

● ちはやふる神のいかき「を」こゆる身は草のと□□になにかさはらん「(五二ウ)」

あつまをすかゝきてひたちにはたをこそつくれといふ哥をこゑは

□まめ□てすさひる給へり

ひたちにはたをこそつくれたれをかね山をこえ野をこえ君

かあまたきませる 風俗常陸哥也

鈍色

やう／＼おきゐて見給・に・ひ・いろのこまやかなるかうちなえたるとも  
火色  
をきて 火色 紅也

●三條内大臣火色の下襲と思て搔練カイネリの下襲を被用事有けり

傍輩見之搔練といふ内府人の僻事思へり〔内〕府不被分

別火色は面裏紅の□〔物〕中へあり至極の晴ニ用□搔練〔は〕

両面ふくさはりのなかへなし次晴に用之

但紅葉賀烏<sub>ニ</sub>外祖〔母〕服三ヶ月之後除服云々然者猶鈍色

と可〔讀〕歟如何然而初參の吉事によりて一日紅衣をき給〔五三オ〕

へるなら〔ん〕かし

四位〔五〕位こき〔ま〕せにひまなく出いりつゝ

●見わたせは柳さくらをこきませて宮こそ春の錦なりける

古今  
素性

むさしのといへはかこたれぬと〔紫〕のかみに書給へるすみつきのいとこ〔と〕

なるをとりて見給

● 知ねとも武藏のといへはかこたれぬよしやそこそは紫のゆへ

〔心〕にまか□てゐてはふらかしつるなめりとなくくかへり給にけり

● 身はすてつ心をたにもはふらさしつるにはいかよなると〔し〕るへく  
古今  
興風

● 放埒也 ● 軒騫翥 ハフル 文選一 (五三ウ)

● 光源氏物語末摘花 若紫並

〔わ〕□〔む〕□〔ほ〕〔り〕の兵□大輔

● 王家無ふ倫 皇孫也 我無ふ倫

● 法華經化城喻品云 世雄無等倫 云々

琴をなんなつかしきかたらひ人と思ふ給へきときこゆれ〔は〕みつ

のとも〔に〕ていまひとくさやうたてあらんとの給 いまひとくさは酒敷

● 琴詩酒友皆抛我 雪月花時取憶君 白氏

● 今日北窓下自問何所爲欣然得三友者爲誰琴罷輒舉

酒と罷輒舉詩三友〔逋〕相引循環無止時一彈恹中心一〔詠〕  
吟(朱)

暢日友猶恐中有間心醉弥繼之

文集六十二 北窓三五

三友是也

もの□あはれしる人こそはあなれもゝしきにゆきかふ人もこそ

との給て〔琴〕めしよするもいかゝきゝ給はんとあいなうむねつふる」(五四オ)

● ことのねをきゝしる人もある物をなへにいまそたちいてゝをゝもすくへき

かの〔な〕てしこ□□たつね給はぬをヒヒをもきこうにおほしいつ

● 劫 コウ ツムルナリ

心のとかにてむつかしういひう□〔む〕るおやはらからなともなく心やすからん

中くになんらうたかるへきとの給へはいさやさやうにおかしやかなる御

かさやとりには□しもや侍らさらん

い□□とせなかとゆ〔き〕すきかねてやわかゆかはひちかさのひち

かきのあめもふらなんしてたをさあまやとりかさやとりて○まか

らんしてたをさ 雑藝

八月はつかころとよひすくるまてまたるゝ月いと心もとなきに

● 〔し〕たにの□〔戀〕れはくるし山のはに〔ま〕たるゝ月のあらはれはいかに 六帖

けはひしめやかにえひのかいと〔な〕つかしうかほ□いてゝおほとかなるを

されはよとおほさる」(五四ウ)

● 衣被香事 裏香 ※ コロモニツム 在東宮切約 裏被香

い□□□□君かしゝまにまけぬらんものないひそといはぬたのみに

● しゝま 誓言也 又無言之儀也

の給もすてゝよかしたまたすきはくるしとの給

● おもはすはおもはすとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる

● 襷タスキ 袴チハヤトモ タウサキトモ

おほひちりき さくはちのふる

● 大筆策 天台大師作 今絶而無之  
● 尺八笛 長一尺八寸 舌四寸八分

● 筆策 律書圖云大々□□々々 畢栗二音 俗云比知利岐

● 尺八 律書圖云々々爲短笛

しかくなとのゝしる そのうつくしみ

● 試樂也 ● 愛 (五五才)

御たいひそくなとやうのもろこしの物

● 御臺秘色事今秘〔色〕磁器世言錢氏有國越州燒進不得

臣鹿用之故云秘色比見陸龜菴集越器云九秋風露越

寒門奪得千峯〔翠〕〔色〕來好向中霄盛沈濟共秘中散闕遺

杯乃知唐已有秘色非錢氏爲始 類說

ないけうほう ● 内教坊 大宿の傍也

いのちなか〔け〕れはかゝるよにもあふ物なりけり

● 庄子云壽則多辱 イノチナカキ〔モ〕ノハハチヲホシ

● 論語云老而不死是爲賊以杖叩其胫

あやしうひなひたるかきりにて

□〔な〕ひたる ヒナ 鶻字古來所用來也

● 夷字 ひなひたるといふはかたくなしくる中□□□□也  
俊成卿〔朱〕  
五条三品 源光行不用此字 (五五ウ)

あなかたわと見ゆる物にはなゝりけりとふとめそ〔と〕ゝまるふけん

〔ほ〕□□〔ち〕□□の〔り〕物とみゆあさましくたかくのひらかにさきのか□

まりてあからかにいろつきて□とのほかにうたてあり

● 普賢經云 普賢菩薩乘物大白象鼻如紅蓮花色

いろは雪はつかしくさをきまてしろくひたひつきこよなくはれ 腫〔朱〕

たりし□下長〔朱〕なかななるおもやう

● 少青也 きはめてしろき物はすこしきあをき氣色のまみゆる也

やせ給へる事いとくおしくさらほひてかたのほといたけなるまできぬ

のうへたに見ゆ

- 髡也 サラホウ 庄子文

ゆる□いろのわりなくうは「し」ら□たる一かさねになこりなくゝろみたる

うちきかさねてうへにふるきのかはきぬいときよら□□□はしき□ (五六オ)

き給へりこたいのゆゑつきたるさうそくなりけれ□□わか「や」か□

る女の御よそひにはにけなくおとろくしき事いと「も」てはや

されたり

- 聴色事論語云紅紫不以爲一褻服 葉本 王曰褻服私居服非公 會之服皆不正褻尚不正

服無所施褻

息刑反下同

- 延喜式云聴色事紅梅也 私云紅紫二色禁色也仍紅ノ薄ヲユルス歟

- 袿 ウチキ 有大小宮一の用人之又あるしとおほしき人は

もちゐる也

- きぬのうへにうはき おめらかしたるうへはをり物中へうらはひとへもんの みへなり

きぬの色にしたか「ひ」たるにほひなりきぬには二寸はかり

「お」とるへしうはきのうへにうちきいろかさねはこれもう

はきのことし寸法をと□たる也小袖「の」なかさなるへし (五六ウ)



● 貂フルキノカハキヌ裘見順和名

西宮臨時祭舞人歸路着黒貂皮衣

云々

貂フルキケタモノ也

きしきくわんのことくしくねり「い」てたるひちも□□□□□□

● 儀式官也

松の雪のみあたゝかけにふりつめり

● 深雪積松色暖 古人の申しはみとりの松にしろたへの

雪かさなりたるかあたゝかけなるといふにや又みやまには松の

ゆきたにきえなくに宮こはのへにわかなつみけりなといへるは

松はあたゝかなる物「に」て露も時雨もそめす霜に「も」雪□

もおとろふるいろなしさらは松の雪はとくこそきゆへきに

猶のこ「り」なからみや□の□へはわかなつむ程になりけりと

いふにや松の「雪」のみといへるはことこそ急□□□□□□□□ (五七オ)

なりといふにこそとなん申侍し

な□「こ」すゝ急のなとおほゆ

● 我袖はなにたつすえの松山かそらよりなみのこえぬ日そなき

はしたなる女そいてきたるきぬは雪にあひていとゝすゝけ「ま」さりて

かともりのおきなよひいたされて子にやむまこにやはした物  
めかしき女をゐてきたるといふ也

わかき物はかたちかくれすとうちすしたまてはなのいろにいてゝ  
さむしとおほしたりつるおもかけまつ思いてられてほゝゑまれ給

● 夜深爐火盡霜雪白粉々幼者形不徹老者體無温悲端

与寒氣併入鼻中〔辛〕

文集秦中吟

御けつりくしのお□なと

● 天子の御くしけつりたてまつ□時に上臈御くしをはらひ（五七ウ）  
中臈けつりたてまつる

つゝみに□ろもはこのおもりにいとこたいなる□□□きてをし  
いてたり

● 後撰云元長のみこになつのさうそくして「お」くるとてそへ  
たりける 南院式<sub>β</sub>卿のみこの女

● わかたちてきるこそうけれ夏衣おほかたとたみ見へきうすさを

● この人も夫の愛念はうすかりけるにこそ

袖まぎ「ほ」さん人もなき身に

● あは雪はけふはなふり〔そ〕白たへの袖まきほさん人もなきみに  
いまやういろのえゆるすましくつやなくふるめける

● 聴色今様色共〔紅〕色〔也〕  
見延兵式

● いまやういろゆるしいろ同事歟紅ニならへ□□□るし〔い〕ろ〔と〕 (五八オ)

いひ紅ニ訓する時はすなはちいまや□□いろといふ□□へし

なにニこのすゑニつむ□を袖〔に〕ふれけん

● 人しれす思へはくるしくれなるのすゑつむ花の色にいてなん 古今

いろこき花と見しかとも

● くれなるを色こき花と見しかとも人をあくたににはうつろひにけり  
ヒヒ

心くるしのよやといとなれてひとりこつ

● かはかみやあにふのいけのうきぬなはくるしきものはよにこそ有けれ  
むめの花のいろのこと

● にほはねとほゝゑむ梅の花をこそわれもをかしとなりてなか〔む〕れ  
みかさの山のをとめを〔は〕〔す〕てゝとうたひ□□□□□給

● 求子哥 モトメコ かすかの社にては見かさの山□□□□をはすてゝ

とうたふ石清水賀茂にては□かはりてうたふなり (五八ウ)  
(不明)

●拾遺云はしめて平野祭に男使たちし〔時〕うたうへき哥

と〔て〕よめる 大中臣能□

●ちはやふるひらのゝ松の枝しけみちよもや□□□□□□□□□□

えひそめのをり物の御そ おとこた〔う〕□

●えひそめ 紫のくろき色也 ●男踏哥事 委細有初春哥

きやうたい からくしけ かゝけのはこ

●鏡臺 ●唐匣 ●搔上篋

またるゝ物はさしをかれて御けしきのあらたまらんなんゆかしき

●あらたまの年たちかへる朝よりまたるゝものは鶯のこゑ

さえつるはるはとかろうしてわなゝかしいて給へり

●もゝち〔と〕りさえつ□〔春〕〔は〕物□とにあらたまれともわれそふりゆく

ゆめかと思とうちすんしていて給 (五九オ)

●わすれては夢かと思ふ□□□□□〔雪〕〔ふ〕みわけて□□□□□□

●變態續粉神□□聲宛轉夢非夢

こたいのおは君の御〔な〕らはし

●古代 おは君 むは〔君〕也

御すゝりのかめの水ニみちのくに「か」「み」をぬらしてのこひ給へいちら  
かやうにいろとりく「は」へ給なあかゝ覽はあえなんとたはふれ給さま  
もいとをかしきいもせとみえ給へり

● 我にこ「そ」つらさは君か見すれとも人にすみつくかほのけしきよ 平仲妻哥

● みちのくにかみ 檀昏をいふ

● 古序云みちのくの「ま」ゆみのかみと「い」「へ」「□」 (五九ウ)

## 補注(一)

その(一)は本文中に間々所見される追訂のひとつであるが、本文書写後の補訂に当り、書写本文―主に假名遣い―の上に重層して補筆した文字である。しかし、此の追補は書写直後の訂正か、あるいは更に其後、時期を隔てゝの本書所持者などによるところか否かの認定は甚だ困難にして断定を踏われる。が、その筆跡より感受されるのはやはり異筆の印象が拭われない。且つその期をへだつとはいへ、室町期を更に降る補訂ではないことを併せ思い、煩瑣ながら、参考までに確認しうるは原本文と対比し揭示したものである。

又、上記したごとくに、所引の内・外典等に於ける訓点―主に朱墨附訓・返点等―には屢々兩種、或は三種にも及ぶかと推定される追補の筆跡が散見されるのであるが、逐一の掲出は著しき煩縷に及ぶことをも含めて已得ず省略することにした。補注(二)にもわたることであるが、かゝる追補・訂は累層的な結果が現状である。影印・翻印共に充実は期しがたく、その一端をも補足し得ればと補注した。

その(二)は、前者同様の重層する追補・訂である。前者と別して揭示したのは、重書きの加筆とは異なるものであり、異筆、筆墨の濃淡などから弁別可能の箇処も看取されるからである。当然の事ながら、その例はすくない。その(三)は、本書本文に於ける存疑を他本との照合によって纒かながらに校勘、言及したものである。疑点は言うまでもなく解消するところではなく猶多く今後に残され、御教示を賜れば幸甚である。

翻印本文中に※印を附したるが当該箇処である。

猶、次の一例、三丁表二〇行の「さゝやか」の四字は一旦書誤りしを摩削せし痕跡あり、その却除の上に書写せし異例が見出されるので序いで附記しておく。

### 補注(一)

七裏三行 うちしきるおりはノ「お」字は原「を(越)」字——以下同、省略—の上に重書きし訂している。本書とは筆跡を異にするがごとくであるが猶断定は踏われる。以下、「お↑を」と略記することにする。

九表三行 うち「お↑を」しう、一五表二〇行 おやの「お↑を」やと、一七裏三行 「お↑を」りこそ、一八表二行 ゐたち「お↑を」ほしいきつき、一九裏二〇行 あ「せ↑<sup>(判読不明)</sup>」なゝん、二六表六行 「お↑を」りてみは、三九裏六行 けに

「を↑お(於)」もかるへし、三六表八行 その「お↑を」ん、三六表三行 ふひやう「を↑お(於)」もきに、三三表一行 めも「を↑<sup>(判読不明)</sup>」よはぬ、四〇裏四行 俳諧<sup>(サレウタ)</sup> (左右傍訓ハ細書ノ上ニ太字ニテ書重ネル歟)、四〇裏九行 かきを

「を↑お(於)」きまとはし、四二表二行 お「ら」はや「お↑を」らむはつ霜の「を↑お(於)」きまとはせる、三六裏三行 ・展季<sup>(テシキノマメヒト)</sup> (右傍訓、原細書ヲ太字ニテ重書キス)、三六裏三行 中に「を↑お(於)」らん、四三裏四行 待

つゝ「を↑お(於)」るに、四五裏三行 田持<sup>(村殿)</sup>「丸↑<sup>(判読不明)</sup>」、四六表七行 しうに「を↑お(於)」くれて、四六裏三行 筆□「を↑お(於)」さへられし時、四六裏五行 「空↑<sup>(判読不明)</sup>」蟬の城外、四六裏二〇行 つゝら「お↑を」り、四五裏二行 「お↑を」さなく、四五裏三行 「お↑を」かしけな(り)、四五裏三行 たなゝし「お↑を」ふねこきかへり「お↑を」な

し人をや、四五裏三行 たつね給はぬを「を↑お(於)」もきこうに、四五裏五行 褻／息刑<sup>反</sup>反下同／同(同／同)字細書ヲ更ニ太字ニテ重書キス、

以上、「補一」は数例をのぞき、「お」「を」の假名遣いの追訂である。

### 補 注(二)

以下も書写後の追訂であるが、本文筆写の筆跡か否か判定しがたきが散見する。当該箇所については「別歟」と附し、又あきらかなるは「別」と附記する。

二〇表二〇行 やもめノ右墨傍記「痿」(別歟)、二四表二行 秋燈挑<sup>盡</sup>尽未能眠ノ「尽」<sup>盡</sup>であるが先ず「尽」は原「盡」を薄墨訂(別)、右傍記「盡」薄墨補(別)、二六表九行 を<sup>おほ</sup>やけのかためとノ右傍記墨訂「おほ」(別歟)、三五裏二行、幽仙窟文ノ左墨傍記「遊歟」(細筆別歟)、四五裏三行 田持丸將軍ノ右墨傍記「村歟」(別)、四七裏七行 山ちのつ<sup>遊歟</sup>ら<sup>於</sup>をりノ右墨傍記「於」(別歟)、五五裏二行 ある物<sup>なへに</sup>をノ右墨傍記「なへに」(別歟)、五五裏二行 こ<sup>古</sup>たいのゆゑつきたるノ右墨傍記「古代」(別歟)、五五表五行 委細有<sup>ヒビ</sup>初春<sup>音</sup>与ノ右墨傍記「音」(別歟)と、その箇所は比較的尠い。しかし掲示したのは筆墨・跡において異和感の残る箇所にかぎったものである。

### 補 注(三)

※二丁裏七行、「譽」字を京研本「擧」とするも他本、京図・内A・松・竜・内B・神・東本のいずれも、「譽」とあり。  
※三丁表三行、「民部丞」とあるは内A本の一本であり、他七本、京研・京図・松・竜・内B・神・東本は「式部丞」に作る。寛弘五年、六位藏人「惟規」の項に「兵部丞」——「御産部類記」上——(藏人補任)と附記する。

※一一丁表三行、「人のおやの〔心〕〔は〕やみに云々」歌の出典に、「拾遺／兼輔」とあるを、京研本以下諸本すべ



て「後撰／兼輔卿（兼輔朝臣）兼輔」と誌す。当該歌は後撰集卷三五、二〇三番の所収であり、本書の顕著な錯誤のひとつである。

※三丁表三行、内A本に「疑」とあるを除き、諸本「隸」字、即ち「隸」の異体の運筆と判断され、「句點をきり隸字をつくといへとも」の文脈となるも、その意は通しがたい。内A本に拠れば一通り解義しうるが、猶審らかにしがたい。

※四丁表七行、「花鳥の色をもねを〔も〕云々」歌作者に、「後撰／雅正朝／□歟」と書写する。他八本、京研・京図・内A・松・竜・内B・神・東本はすべて「後撰／雅正朝臣」とあり、「歟」字不審。後撰集卷四夏三番に勿論同作者・歌を収載す。

※五丁表五行、本書に「かのおは」と朱声点を附すが、京研・京図本には「かのおは」と附点する。他本朱声点を欠く。本書のそれは誤記にあらざ虫損によるものゝようである。九行目には明確に「おはの女の」と朱点を施しているところからもあきらかである。

※五丁裏四行、「音韻」は諸本、京研・京図・内A・松・竜・内B・神・東本すべて「音歌」に作る。本書のそれは「韻」にもあらず、「敵」の異体とも字様から判断しかねる。本来、和名類聚抄に「横笛音歌和名與古布江」（元和古活字那波道圓本等）の「敵」又は「敵」であろう。観智院本類聚名義抄に「敵」の訓があることから「音歌（又は敵）」とするが妥当と推測される。本書筆写者の誤写か、或は書癖か、ひとまず其儘の字体に従う。

※五丁裏九行、「〔必〕所召見者・篇中見之云々」の「所」を諸本、京研・京図・内A・松・竜・内B・神・東本、は

「所」とする。本書の誤訂歟。

※六丁表四行、「景帝更<sup>アラ</sup>」名曰<sup>タメテ</sup>「大行人<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>」とあり、内A本のみ同文にて他七本、京研・京図・松・竜・内B・神

・東本には「景帝更<sup>アラタメテ</sup>」名曰<sup>ニ</sup>「大行令<sup>ニ</sup>」(京研・京図本ニヨル)と記す。但し、竜・内B・神・東本は「更」字を

「<sup>更イ</sup>□」とし、「<sup>更イ</sup>□」圏に誤字を書写している。本書・内A本が「令」を「人」、「之」の二字に誤りたる歟。

※六丁表三行、「大<sup>ニ</sup>使王<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>短<sup>ク</sup>」は京研本と同じくするが、京図本には「大<sup>ニ</sup>使王<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>短<sup>ク</sup>」に作り、又松・竜・内B・

神・東本には「王<sup>大使</sup>父<sup>ニ</sup>短<sup>ク</sup>」と誤る。更に内A本は「王文短<sup>ニ</sup>」と誤写している。続日本後紀、類聚国史共に多く「王

文短」と記す。「短」は「矩」の異体と判断される。

猶言添えれば、嘉祥二年渤海国大使の入覲の儀は光孝天皇にあらず仁明天皇の誤りたるはいうまでもないが、

当該記の原処を審らかにしない。

※七丁裏三行、「右大臣已<sup>ニ</sup>下」とあるは他八本、京研・京図・内A・松・竜・内B・神・東本共に「左右大臣已<sup>ニ</sup>(以

下」と書写す、本書の誤脱歟。

※八丁表二行、「<sup>付箋</sup>ゐたちおほしいきつき」は、京研・京図・内A本「<sup>付箋</sup>ゐたちおほしいきつき」と見え、松・竜・内B・

神・東本「<sup>付箋</sup>ゐたちおほしいたへき」と誤写する。釋義に「<sup>付箋</sup>居起也　・勞也」とあり、本書の単純な誤記であ

る。因みに尾州家河内本には「<sup>付箋</sup>ゐたちておほしいきつき」と見ゆる。

※九丁裏二行、「<sup>付箋</sup>拾遺云……能宣」の記は諸本すべて八行目の「ゆひ〔そ〕むるはつもとゆひの云々」歌の前行

に位置する。同歌は拾(三七番)・抄(二七〇)共に類同する詞書のもとにある能宣歌であれば、当然の事ながら諸

本は処をえている。しかし、本書は単に書写上の錯叙とのみ断定しがたく、尠くとも依拠本の序に順ったので

あろう。臆測を馳すれば、あるいは、定稿にいたる経過の一端を遺留するものではないかとも予想されるころである。

※三丁裏九行、「焉スヘナキ無」の「焉」字であるが、諸本は殆んど相類同し、「焉」「烏」両字の草体としていずれとも識別しがたく、將に「焉烏」の譬え、いま先学の選択に遵い「焉」字に翻した。

※四丁裏七行、「みよしのゝくにのかみ」を他八本、京研・京図・内A・松・竜・内B・神・東本、「みのゝくにのかみ」とする。本書の誤歟。

※四丁裏八行、「うちひそみぬ」の釈義は、「・嘸ヒソム云々」以下、諸本共通するところであるが、当該字「屈」の書写筆跡には、本書のごとくに一字体として表記する伝本と、二字「口出」を書写するものにと一稍々判然としがたきも存するが―識別される。管見する纒かな伝本にすぎぬが、以下のごとくである。

「屈」―本書・内A・松・竜・内B・神・東本、「口出」―京研・京図本  
とに分れ判別される。

しかし、いずれにせよ当該字を「ヒソム」と訓読するのは困難であらう。いくばくかの机辺の辞書類を探るところ、石川雅望の「雅言集覽」に、夕顔卷の上掲本文をあげて、

……前略……〔萬、四ノ五五〕百年爾老舌出而與余牟友吾者不厭戀者益友トイフヲ〔六帖〕ニおうなノ題ニおい  
くちひそみなりぬともわれはわすれじト引直シテ入タリ云々……後略……

とあるによつて、「校本萬葉集」の当該歌―卷四、七六七、大伴家持歌―を検するところ、その「訓」異同に、訓(い)オシタイテ、桂、「おいくちひそむ」。神、「オヒシタイテ、」。温、「ライシタイテ、」。西、

矢、「舌出」ノ左ニ「クチヒソミ」アリ。京、「舌出」ノ左ニ「クチヒソニ」アリ。緒ニテ消セリ。マタ漢字ノ左ニ緒「オイイテヒソム多本」アリ。

と見え、「舌出」の訓に、「くちひそむ」（桂本）、「クチヒソミ」（西本願寺本・大矢本）、「クチヒソニ」（京大図書館本）等が散見され、「舌出」の訓ではあるが、当該歌句には同一訓が嘗って併存していたことが知見される。猶同校本新增補中に、元暦校本断簡にも

「訓」(い) オイシタイテ、元、「おひくちひそみ」。

と存する。既に素寂以前にも同類の訓が施されていたことが判明する。

しかし、「舌出」を「屈」又は「口出」とする異同本文を不識にして迎ることを得ない。憶測にすぎぬが、あるいは、この「くちひそむ」の「くち」に牽引されての表記ではなかったらうか。それが素寂か書写者のなすところかは推すべくもなく、又、本書のごとく一字か京大研究室本のごとくに二字であるが正確であるかも俄には又決しがたい。ともかくも、かゝる表記にいたるの経由は否定しがたいかと思われる。

蛇足ながら付加えると、「雅言集覧」の引例には、淵源はもとより存するが、同校本に眉欄註記するごとくに「和歌童蒙抄」に拠つての着意、補記であらう。

※三五丁表二行、「帝範」と出典を誌すのは、内A本の一本であり、他の京研・京図・松・竜・内B・東本は此れを「史記」としている。神本は此の附記を欠いている。この適材登庸の寓言は「帝範上審官篇」に所見するのであるが、現在のところ、史記の中には看取していない。同三注の中にも附言するところでもあるのかもしれない。門外にて審らかにしない。たゞ此処にて解しがたいのは両様の典拠にわかれることである。本書はもとより京

研本も又南北朝末室町初期を降らざる古鈔本であれば、その成立当初より此の出典の記を異にする伝本が存したこととなり、後人の訂正というより寧ろ其の選述期のことさらに帰せられるべきかと推せられる。しかも共に当然のこと選者の知見の範囲内であれば何等かの錯誤による誤記の改訂と推測するのが自然である。

かゝる推論が是認されると、京研本↓本書と補訂の経由が想定されてくるのであるが、解題中にも言及したごとくに結論は短絡しがたいものを内包している。即ち本書が京研本に対し極めて隣接しながらに猶稍々未整然的な一面を提示しているからである。同解題にゆずり、此処では纔かな一例ながら伝本上に於て二分することと述べ、この点では巻第編成を同じくする内A本は同一系統上に派生した増補一本たる一傍證ともなるうか、と附記するにとどめる。

※三丁表九行、「不捨<sup>スタハテ</sup>」とあり、字義未詳。内A本は「不捨<sup>スタハテ</sup>」に作る。前書のごときに牽引されての書承か。他の京研・京図・松・竜・内B・神・東本は「不撓<sup>スタハマ</sup>」に作る。内A本とこゝにも同じき本文の傾向をみる。但し、附訓は京研本「タマハ」に誤る。

※三丁表三行、「神咒」とあるは本書のみにして他八本、京研・京図・内A・松・竜・内B・神・東本のすべて、「唱神咒」と書写する。文脈よりして本書の誤脱であろう。

※一三丁表七行、「<sup>ス</sup>嫁<sup>ス</sup>」〔晚〕「孝於姑」とあるは、京図・内A・松・竜・内B・神・東本の七本である。京研本のみは「<sup>ス</sup>曉<sup>ス</sup>孝於姑」に作る。白氏長慶集（藝文印書館印）も又当然に「嫁晚<sup>ス</sup>孝於姑」とする。

※二三丁表七行、「<sup>若</sup>聞口欲娶婦娶婦意如何」と同一本文は京図本の一本のみ、内A本は「<sup>若</sup>聞若欲娶婦意如何」と誤脱し、又京研本一本には「<sup>若</sup>聞若欲聚婦聚婦意如何」に作る。松・竜・内B・神・東本の四本は「<sup>若</sup>聞君欲取<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>婦娶

婦<sup>ラム</sup>」と誤写・誤脱する。白氏長慶集（上掲本）は「聞君欲娶婦娶婦意如何」とあり、本書とは「君」一字を除き一致する。「若」「君」の草体が結果したものにすぎないであろう。

※三丁表九行、「けなつかしき云々」の朱傍記「人家」を京研・京図本は「人氣也」と朱書す。その他の伝本は傍記を欠き、別行釈義に「氣也」と注す。本書は稍々妥当性を失するの感がある。但し内A本には傍記、釈義共に脱す。

※三丁表三行、「・楚屈原維王」、此の「維」字は、「懷」字草体とよく近似による偶発の結果と推測されるが、やはり「維」字と判断される。内A本は明らかに「維王」と書写している。京研・京図本には共に「懷王」に作るに より訂せられるべきであろう。松・竜・内B・神・東本は「維王」と懷或本（但シ、松本「懷」ニ誤ル）両本文を書写校合している。両字草体の近似により誤謬の因をなしている。

※三裏三行、「・戊子日在子五ヶ日」の「戊」字を諸本「戊」時に「戊」に記す。「戊」は「戊」「戊」なるかほともかくも「戊」の異体歟。次行の「至于戊刀日」も同様である。当該部も諸本過半は前例と同じく「戊」字とする。

※三丁表六行、「とうもなくて」に京研本は「とうもなくて」と朱声点を附している。本書の当該部は虫損裏打の処にあたり不明、あるいは同様に存したる歟。他諸本は声点を欠く。

※四丁表三行、「かたほなる」に京研本「かたほなる」と朱声点を差す。他本同様に声点欠。

※四丁表八行、「あてはかにゆへつき」の「は」に朱声点を欠くは虫損によるものである。附点本である京研本は「あてはかにゆへつき」と声点を差している。

※1・2元丁表三行、「眞色迷人應過此彼眞此假俱迷人」、京研一本のみ1・2共に「直」に作る。他七本、京図・内A・松・竜・内B・神・東本本文は本書と同じくする。白氏長慶集（上掲本）も共に「眞」。又京図・松・竜・内B・神・東本に典拠「文集古塚狐」と誌す。

※翌丁表五行、「後漢書」〔列伝第〕冊九／□□〔傳〕は、京研・京図・内A本の三本には、「後漢書列伝第卅九王充伝」、松・竜・内B・神・東本に「後漢書列伝第三十九王毛伝」と書写している。同書列伝を検するに注引本文は「列伝第三十九／王符伝」の中からの抄出であり、「第卅九」とあるが正しく本書の「第卅九」は錯誤である。あるいは、列伝第三九卷は後漢書四九卷にあたり、同卷第に牽れての錯過であったかもしれない。同様に京研本以下三本に誌す「王充伝」も同卷初の列伝名に拠っての誤記であろう。松本以下数本のそれは転写上に生じた過誤と判断される。

猶京研本に看る「累卵之花」は「危」と「花」の草昧の疑似による過失であるのは記すまでもない。

※兕丁表三行、「夕瘡」は京研本は「瘡」「瘡」との孰れとも判断に迷うところである。内A本は明らかに「瘡」である。天治本「新撰字鏡」の疒部には「瘡失廉反都念反瘡也」と誌し「瘡也」としている。吉澤義則氏の本注はこれにより「瘡」字を当てられている。大漢和辞典を検するに、まず「瘡」をあげ、『瘡』に同じ。〔集韻〕瘡、或从「固」とも解字されている。次に「瘡」字をあげて「〔説文〕瘡、有熱瘡云々」等を例示している。書写字体の判然とせぬまゝに注記し後考を俟つことにする。

※兕丁表二行「京の花さかりは……またさかりにてト」と不明「ト」墨痕をとどめている。当該巻を欠く京図・松・竜・内B・神・東本は当然未詳ながら京研・内A本には存せず、本書のみであるところから恐らく全巻改装裏

打の際、偶々他の小破片が同処に附着したものであろうか。

※五丁表二行、「琵琶云々」の「琵琶」字草体、稍々不分明なるも当該字と判断される。内A本は、「琵琶」と書写する。然るに京研本「・瓠巴」に作る。出典の列子、湯問篇に「瓠巴鼓琴而鳥舞魚躍」と見え、楚人、琴の能手、とあれば本書の謬であろう。「琵琶」、「瓠」の両字草体よく類似するにより偶然の写誤か、運筆上の結果であろう。内A本は同型の草体から更に「琵琶」と意解したものと推せられる。

猶、次の六本、即ち、京函・松・竜・内B・神・東本は以下両巻は欠巻部に当る。

※三丁表三行「いとひては云々」歌を伊世語とするも天福本伝定家筆本以下「いてていなは」とし、塗籠本等に「いとひては」に、又古今和歌六帖に「いとひては」(桂宮本)に作る。京研本は「いとひては」と濁声点を附すが未詳。内A本「おもひ出は」とするも審らかならず。

※五丁表六行、「一詠」暢日友の「日」は「四」とも判読可能であるが、内Aは「一詠暢日友」、京研本には「一詠暢日支」に作り、前者と共に意味を通じがたい。白氏長慶集(藝文印書館印)第二九巻の「一詠暢四支」の草体の誤写歟。

※五丁表一行、「裏香」、又続く「裏コロモニツ、ム」、「裏」の部首は冠のごとくであるが、やはり上掲字が妥当であろう。和名類聚抄、卷六調度部に「裏衣香」を見ゆる其れ歟。京研本はこれを二字に作り「裏衣香」とする。下の当該字も同様である。図書寮本「類聚名義抄」に、「裏」の許に「ツ、ム異」と共に「東云裏衣香」とあり、その用字に拠れる歟。猶大漢和辞典にも「裏」字に作り、「かほりが衣にしみわたる」の用例を示している。内A本は当初の字は「裏エウ」としながら以下を「裏衣」の二字に作る。他五本はいずれも欠巻部。



※矣丁裏四行、「不以為一褻服」は京研・内A本は「不以為褻服」に作る。本書が「褻」を二字と錯誤せることは明らかである。論語（郷党）第十は記するまでもなく「褻服」である。

※矣丁裏二行、「□るし「い」ろ「と」／いひ紅ニ訓する時は云々」と「訓」に濁声点（墨）を差している。京研本にも「訓」と略同様に施しているが未詳である。猶京函・松・竜・内B・神・東本は欠巻部である。